創業百年史
日本橋とともに

小堺化学工業株式会社

創業百年史 日本橋とともに
小堺化学工業株式会社

発刊にあたって



1918（大正７）年６月、日本橋にて小堺長一が創業して本年で百年を迎えました。
当時は大正デモクラシーの真っ只中、富山では米騒動が起こり、寺内内閣が総辞職、原政権が誕生するなど混沌とした国内情勢でありました。しかし 1914 年に始まった第一次世界大戦も終結し、日清・日露戦争に続けて大勝していた日本は欧米の列強に肩を並べるほどの存在感を示し始めていました。

またパイロット、豊田紡織、松下電気器具製作所などの企業が誕生し、レナード・バーンスタインが生まれ、ロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世はロシア革命によって処刑されています。このような時期に薬業界で起業した初代には現代では到底考えられないような苦難の道が幾多もあり、相当に強い意思を持って邁進していったことが窺い知れます。

当社はその後の関東大震災及び東京大空襲により被災し、資料など全く残されておらず、周年誌など過去に発行された形跡もありません。この百年史は数少ない情報をもとに作成しており、関わった編纂スタッフの血の滲み出るような努力に感謝の意を表する次第です。

もし訂正すべき箇所があるなら、この百年史を天国へ持参した際に、先立った先輩たちと酒を酌み交わしながら伺おうと思っていますが、ここ日本橋で先達が積み上げてきた歴史は紛れもない事実であることを現在の築き上げられた信用が物語っています。また創業時からの訓として、顧客同様仕入先、従業員を大切にしていく精神は受け継がれており、さらに磨きをかけてまいりたいと思います。

今後も創業時の精神を心に刻み、更なる百年を目指して邁進してまいる所存です。益々ご贔屓にあずかりますよう衷心よりお願い申し上げ、百周年を迎えるご挨拶とさせて頂きます。

2018 年 6 月　代表取締役社長　小堺　裕一郎

目次
CONTENTS

01 発刊にあたって
代表取締役社長 小堺裕一郎

03 会社と当主 百年の歩み
創業者 小堺長一　NOVEL-VOL.1
合資会社 小堺商店　NOVEL-VOL.2
室三横丁の風 小堺榮一　NOVEL-VOL.3

11 100年の沿革
日本橋とともに歩んだ100年 薬問屋から食品事業への転換

17 1918-2018 小堺化学工業飛躍の100年

19 小堺化学工業のメセナ活動（社会貢献）
－日本橋への思い－
お江戸日本橋伝承会
日本橋富沢町 樂琵会

23 日本橋歳喰記

27 座談会
小堺化学工業の“当時”を呼び起こす
歴代の盟友たちが100年を振り返る

35 OB・OG100周年アンケート

37 社員旅行年表

39 資料編
歴代役員任期一覧
社員数と売上高
組織図

41 創業100周年記念パーティー

42 あとがき

※表紙は、昭和7年頃の室町3丁目地図

会社と当主 百年の歩み

CHRONOLOGY



1893年（明治26年）	7月27日	創業者 小堺長一 誕生
1918年（大正 7年）	6月	小堺長一、東京市日本橋區本石町にて小堺長一商店を創業
1919年（大正 8年）	8月1日	二代目 小堺榮一 誕生
1923年（大正12年）	9月	関東大震災で社屋全焼
1932年（昭和 7年）		町名が日本橋區室町へ変更
1935年（昭和10年）	8月	合資会社 小堺商店となる
1947年（昭和22年）	10月	小堺化学工業株式会社に社名変更
1948年（昭和23年）		王子倉庫を開設
1951年（昭和26年）	3月16日	三代目 小堺裕一郎 誕生
1952年（昭和27年）	12月10日	初代 小堺長一死去（享年59）
1953年（昭和28年）		小堺榮一、二代目社長に就任
1960年（昭和35年）		本社を中央区日本橋室町へ新築移転
1971年（昭和46年）	4月	関西営業所を大阪府高槻市宮野町に開設
1977年（昭和52年）	9月	関西営業所を大阪市南区長堀橋に移転大阪営業所と改称
1983年（昭和58年）	11月	王子倉庫を新築
1988年（昭和63年）	5月	小堺裕一郎、三代目社長に就任
1991年（平成 3年）	4月	静岡営業所を静岡市沓谷に開設
1995年（平成 7年）	2月18日	二代目 小堺榮一死去（享年76）
2004年（平成16年）	2月	大阪営業所を大阪市西区阿波座に移転
2005年（平成17年）	3月	本社を中央区日本橋富沢町2-6に移転
2009年（平成21年）	11月	静岡営業所を静岡市駿河区泉町に移転
2015年（平成27年）	9月	本社を中央区日本橋富沢町11-7に移転
2018年（平成30年）	6月	小堺化学工業株式会社 創業100周年



初代社長
小堺 長一
大正7年～昭和27年



二代目社長
小堺 榮一
昭和28年～昭和62年



三代目社長
小堺裕一郎
昭和63年～平成30年
現在に至る

創業者 小堺長一

NOVEL-VOL.1

“ジジジーッ”

雪国の夏には残された日々が短いことを悟っている蝉は焦るように鳴いている。突然、木々の間を走り抜けてきた少年は驚いて“チッチッ”と逃げ惑う蝉に怯むこともなく、父“喜四郎”と母“ヨリ”の姿を水田に探した。先月よりは大分伸びてきた稲の中に屈んでいると小柄な二人は隠れてしまう。

半分以上が“小堺”姓のこの集落には“仲村”姓が複数いるにとどまる。明治26年7月に生まれた“長一”は読み書きと算盤（そろばん）に長（た）けた少年であった。本家は“コザカイ”、分家筋の“コサカイ”は無論貧しかったが、雪深い集落に三男として生まれた少年は早世した二人の兄の生まで引き受けたようで逞しかった。長一は尋常小学校を終えると、生まれ育った新潟縣東頸城（くびき）郡山平村を出て東京市日本橋へ向かう。まだあどけなさを残す少年であった。

「ヤイッ！どきやがれ！この野暮天が！」

行李を担いだ田舎者の少年は都会の往来の仕方も知らない。ただ馬車鉄道に慄くばかりで“野暮”と言われても何のことやらわかるはずもない。

東京は江戸時代より比べるものもない巨大な百万の市井（しせい）であった。

しかし、当時日本の公衆衛生は結核が猛威を振るうなど未だ劣悪なものであった。いろいろな奉公先で修業を積み重ね、また当時貴重であった消毒アルコール再蒸留の仕事を通じ、“長一”はこんな衛生環境を改善する仕事に従事したいという思いを強くしていく。

最後に奉公した三ノ輪の山田という薬種問屋では随分世話になり、そして目にも掛けてくれた。おかげで本石町（ほんごくちょう）生まれの“とく”とも所帯を構えることができた。

岩附新道から小伝馬町通りに抜ける“本町御三家”の１つ鳥居商店へぶつかる一本手前の細い路地ではあったが、日本橋區本石町四丁目に「“マルコ”小堺長一商店」を創業したのは大正7年6月、“長一”26歳になる一月前のことであった。

合資会社 小堺商店

NOVEL-VOL.2

「社長！どこへ運びましょうか？」

と声を掛けられ、ふと見ると故郷（くに）より贈られた家内（やない）喜多留（きたる）を社員は忙しく運んでいる。しかし、いきなり社長と呼ばれると少しこそばゆい。

十間はあろう店の間口をアスファルト舗装になったばかりの道路から眺めながら、いつものように「松代町（まつだいまち）はこちらの方角だな」と遥かな空へ優しく視線を向けた。そしてそっと目を閉じると、幾多の出来事が走馬灯の如く脳裏を過ぎっていった。

昭和10年8月、“長一”は「合資会社　小堺商店」を日本橋區十軒店（じっけんだなちょう）町より新たに出航させる。42歳の暑い夏の最中であった。

“とく”と所帯を持ち、のれん分けで本石町に「小堺長一商店」を開いた翌年の大正8年8月1日に待望の長男“榮一”を授かった。商いは順調であった。大正10年12月26日には長女“まつ子”が生まれる。店と“長一”の名前も本町界隈にそこそこ知れ渡る存在になった。

「ダン　ダン　ダン！」

床下から突き上げるように初震は突然襲ってきた。しばらくして治まるかと思うもつかの間、「ゴーッ！」という大音響とともに本震が来た。ガラスが割れて宙を舞う、柱は鳴きながら捩じ切れる。よろけながらも外に飛び出すと、駆けつけて来た義弟二人、“須釜松雄”と“亀之助”に、子供たちに頭から布団を掛けてリアカーで安全な須釜家へ向かうよう頼む。そばでは真っ赤な舌の形をした

炎が市電を蠢くように舐めまわしていた。

大正12年9月1日午前11時58分、震源地　神奈川県足柄上郡松田町付近、マグニチュード7.9。関東大震災によって東京市都心は焦土と化し、実に10万5千人余の命が奪われた。

復興は安易なものではなかったが、30歳になったばかりの若い“長一”には手伝う者が多く集まり、店を再開するまでの日々を辛いと感じたことは一日たりともなかった。

「シューッ！」

アルコール再蒸留を仕事としていたときには違和感は覚えなかった。むしろ心地よかったくらいだ。しかし病院の消毒エタノールの臭いがこんなにも耐えがたいことは金輪際ないだろう。家族一緒の千葉の岩井海岸は愉しい“祝い”の海岸のはずではなかったのか。「間に合いませんでした。誠に残念です。“次回”はきっと……。」最期に立ち会った青年医師は悔しそうに告げた。目鼻立ちがすっきりとして「美人になるよ」と問屋仲間に冷やかされた次女“静江”は昭和3年7月28日、“長一”の誕生日祝いの翌日に疫痢で呆気なく旅立った。病院のベッドで妻“とく”が吸う力も失せたわずか3歳の幼子を抱き寄せ、乳を含ませてやるのをただただ見守るだけであった。

同年2月11日に生まれた三女“節子”の世話に懸かりきりの妻に代わり、妹の面倒を看るよう言いつけておきながら、暑い砂浜を歩く静江におろし立ての駒下駄を貸せなかった長女“まつ子”を叱る気も失せていた。この可愛い盛りの娘の早世は“長一”が店に出るまで1カ月を要するほど応えた。

「ザーッ！ザーッ！」

三井ビルの地下に非難し、空襲警報が解除されて外に出ると悪い予感は現実となって待ち構えていた。

昭和19年11月30日B29の東京初空襲により店は焼け落ちた。しかしその後空襲が本格化する前年の周囲は余り被害を受けていなかったこともあり、薬種問屋仲間からの多くの協力はありがたかった。

その後、阿佐ヶ谷にあった空襲のため建築半ばで頓挫していた家屋を完成させ、一家は移り住む。

また長女“まつ子”の夫“中嶋新一郎”が陸軍情報局の将校であったため、敗色濃厚の兆しは早くから掴んでいた。そしてついに昭和20年敗戦。

「世の中、まるで総天然色映画のように色も音も息づいている」

終戦後の復興の道のりは医薬品業界にとって順風だった。商品を調達することがすべてであった。品揃えができれば商売は立った。さらにそんな時代を後押ししたのは朝鮮動乱（昭和25年）である。戦死した米兵の遺体や傷病兵が日本に送られてきていたが、戦争には加担しないと日本中が好景気を歓迎し、さらに物に溢れた米国の生活スタイルに憧れていった。

昭和22年10月「小堺化学工業株式会社」を設立すると同時に“長一”はいち早く目をつけていたビタミン剤や栄養剤を主力に販売していく。昭和23年には北区・王子にあった電気部品の工場跡を借りて倉庫にした。そして、進駐軍により進んでいく食の洋風化傾向をとらえて本格的に食品添加物の販売へ乗り出していくのである。

“小堺正吉”、“須田廣蔵”、“櫻井晏”の三羽烏と義弟たちも巣立っていった。日本橋・十軒店の店も改築し、故郷の小学校へオルガンを寄贈することもできた。



移転直後の十軒店の前で
（前列 左から3番目が初代・長一
2番目が二代目・榮一）

順風満帆ではあったが、その頃夜の会合が多くなり、体調が気掛かりになっていた。サイレント・キラーと呼ばれる糖尿病は体を徐々に蝕んでいく。大好きであった「てん茂」や「寿司芳」、そして室町の交差点に開店したばかりの速い・安いで大繁盛の百円鰻丼「登亭」も控え気味になった。咳をすると胸が苦しくなる症状は気になっていたが、昭和27年冬の忙しい年末を迎えるとどうも思わしくない。心臓外科の権威に診断してもらってはいたが……。

昭和27年12月10日の寒い日であった。心臓発作を起こすとそのまま危篤になり阿佐ヶ谷の自宅で妻と家族に看取られながら、“長一”は息を引き取った。まだまだ働き盛りの59歳であった。

胸を突き刺すような苦しい痛みの中、雨の日に傘を差しながら革靴を持ってしおらしく後を付いてくる“とく”の姿が一瞬浮かんだ。自宅近くの青梅街道から阿佐ヶ谷駅までの中杉通りはまだ泥道であったが、日本橋の道路は大正時代からアスファルト舗装であった。東京随一の中心地、日本橋をゴム長靴では恥ずかしくて歩けないと“長一”は雨の日の通勤往路は妻に革靴を駅まで運ばせ、そこで履き替えた。帰りはまたゴム長靴を持って迎えに来させていたのである。五尺五寸と明治女にしてはとても体格の良かった“とく”はいつも遠慮がちに体をすぼめて、小柄な夫を傍で支え続けていた。

室三横丁の風 小堺榮一

NOVEL-VOL.3

≪大正12年の関東大震災以降、東京市は帝都復興事業として防災対策のために大きな区画整理を行う。その際に新設されたのが昭和通りである。昭和7年10月には既存の15區に20區が新設され合計35區制の大東京市が誕生した。中央通りに面して東西に日本橋區室町、昭和通りに接しては日本橋區本町となり、薬種問屋が多くあった「岩附町、十軒店町」は室町、または本町へと編入されていった。

この区画整理の際にこんなエピソードがある。江戸薬種問屋街発祥の始祖となったと言われる「いわしや總本店」は慶長11年（1606年）、本町三丁目に創業しているが、17代目松本市左衛門は創業地が当初室町に編入される予定であることを知ると、ほとんどの薬種問屋街が本町という町名に残れるよう町界線を変更するように申し立てた。その結果、現在でも本町と室町の町界線は二丁目の途中から中央通り寄りの西側へ大きくカギ型に折れ曲がっている（昭和35年に建てられた当社本社ビルの位置が本町と室町の境界線である）。

昭和18年になると、東京府と東京市は廃止され、東京都となった。そして戦後の昭和22年3月、35あった區を23に統廃合した際に日本橋區と京橋區は



昭和7年の日本橋區室町三丁目（■部分が小堺商店）

東京都中央区となり、日本橋室町、日本橋本町などとその旧町名を日本橋の冠の下に留めた≫

父“長一”は一人息子である私に期待をかけていたこともあり、厳しかった。もちろん新潟の田舎から上京して一代で築き上げた身上を託すのだから当然のことでもあったろうし、当時はそんな時代であった。一方、次女“静江”をわずか3歳で亡くしたこともあり、妹“まつ子”と末の妹“節子”にはことさら甘かった。ましてやこんなことが起きたのだから尚更のことであった……。

十軒店町には町名の通り、江戸時代より人形市が立ち、有力な人形屋が次第に店舗を構えていった所。そんな内の一軒「玉貞」のショーウィンドウを常盤小学校の同級生“H”と“まつ子”の三人で下校時の日課の如く覗き込んでいたときのことだ。歌舞伎出身で当時人気映画俳優でもあった“目玉の松ちゃん”こと“二代目尾上松之助”をもじって“まっちゃん”とあだ名を付けられていたクリンとした目の妹“まつ子”は自分から見ても可愛く、また界隈でも目立っていた。一緒に歩いているとよく振り返られるのは兄として悪い気もしなかった。“節子”の常盤小学校の一級下、明治18年創業の老舗天ぷら屋「てん茂」三代目“奥田宣男”君からも“小町”と呼ばれ、綺麗であったと後に聞かされた。

一瞬、脇を風が吹き抜けたと同時に“まつ子”は頭から麻の袋を被され、肩越しに担ぎ上げられていた。呆気にとられて、その男を見上げても酔狂でもてあそばれているのかわからない。男二人は室町三丁目の市電停留所の方へ“真っつぐ”、“まつ子”をかついだまま通行人を蹴散らしながら走り去っていく。一早く察知した“H”は機転を利かせ、交差点で交通整理をしていた警察官に向かって大声を張り上げた。「人さらい！」

その時であった。通りすがった若い青年が“まつ子”をさっと男の手から奪い返した。声も出せなかった彼女も泣き叫び始めた。そのやりとりを聞きつけた警察官が笛をけたたましく鳴らすと、男たちはその青年に「ちっ！」と舌打ちをするや、二手に散った。寸での所でもう一人妹をなくすところだった。当時多かったことだが、サーカスにでも売り飛ばされていたのだろう。しかしあの時の青年はまるで予期して待ち構えていたようだった。泣きじゃくる妹を“H”と守るようにすぐさま帰宅した。気が張って興奮してはいたが、安堵する間もなく、すでに騒ぎを聞き付けていた母“とく”からこっぴどく叱られると、騒ぎの中に消えてしまったあの青年の顔は脳裏から消えてしまった。

幼い時からの友人たちは皆生まれも育ちも一緒、日本橋本町・室町・本石町を根城に遊んでいた。常盤小学校の下校途中に三井ビルの中に忍び込み、オーティス社製のエレベーターに乗り込んで守衛さんに叱られる悪戯もよくした。蛇腹の鉄扉を音が出ないようにそっと開閉するのが気付かれないコツ。“H”はそれがうまかった。真夏の日には真鍮製取っ手の錆の匂いと油が汗ばんだ手の平にこびり付き、冒険の後、お互いに嗅ぎあったりしたものだ。

加藤商店（国産化学）の“文ちゃん”こと“加藤文次”さんは親分で、体が大きくとも私はいつまで経っても下っ端、常盤幼稚園の同級生、すばしっこいイワキの“謙ちゃん”こと“岩城謙太郎”君と後から追いついていくだけで精一杯だった。しかしその先のドキドキした遊びの匂いに勝るものはなかった。

≪昭和19年、米軍はマリアナ諸島を陥落、空港を整備するとB29爆撃機による日本本土空襲を本格化させた。そして11月30日、東京初空襲により小堺商店は焼失した。1944年11月30日　米軍はB29 約10機のレーダー照準による夜間爆撃を日本橋区：室町1.2.3丁目、小舟町3丁目、本町3.4丁目、兜町2丁目、茅場町1.2.3.4丁目、江戸橋1.2丁目、通1.2丁目に行った。室町十軒店（現室町3丁目）などに焼夷弾の濃密投下、商店街、工場中心に爆撃、東京貯蓄銀行本店焼失。焼失家屋戸数633、焼失面積44.105平方メートル、死傷者数20、うち死者1
（中央区史より抜粋）≫

幸い家族・従業員から怪我人は出なかったが、空襲により工事が中断していた阿佐ヶ谷の家屋を普請して一家で疎開した。毎日、父と鉄道省（戦後国鉄、現JR）の列車で阿佐ヶ谷駅より神田駅まで通い、店の再開を急いだ。

≪昭和20年8月15日、敗戦。昭和19年1月に創立された醫藥品統制株式會社による統制は終戦後まで続き、昭和21年9月に解散、残務は日本医薬品配給株式会社に引き継がれ、昭和16年から続いた医薬品の統制はついに撤廃されることとなる。
敗戦後も医薬品をはじめとする物価統制令の施行など厳しい状況は続いたが、物不足のため商品を集めることができれば、商いは立った。
その後、日本は昭和25年の朝鮮戦争勃発による特需景気の時代を迎える。
昭和26年、サンフランシスコ講和条約（注；1951年9月8日締結　平和条約とも呼ばれる）が締結された。それは敗戦国日本がこれから大きく復興に向かって歩み始めるエポックでもあった≫

戦後になっても父母は阿佐ヶ谷の田園風景を気に入り、住み続けていたが、昭和27年12月10日、社長であった父“長一”が心臓発作を起こし59歳で急逝した。長年の糖尿病による合併症であった。突然33歳の私に経営が任されることになったが、強い存在感のあった先代から替わっても、果たして引き続き自分を信用してくれる先があるのだろうかと不安で仕方なかった。

≪「抵当権設定　昭和参五年参月弐五日受付第四四壱七号　原因　同月壱五日債務弁済契約の同日設定契約　債権額　金弐百参拾八万円」
昭和35年、住宅金融公庫より238万円を借りた。昭和45年3月まで毎月5日に27,024円、計120回、10年の返済であった≫

昭和28年4月に本社近くにあった19坪の少し小高くなっていた角地を新藤氏から譲り受けた。そこにあった古い木造の建物をそのまま倉庫として使用していたが、配達用のスクーターをしまうためには丈夫な分厚い板2枚を倉庫入り口に毎回斜めに架けて納めるのが厄介であったので、いつかは建替えて事務所にしたいと願っていた。

そんな時であった。現店舗と住まいとしていた離れの地主であった中井洋紙店から高層ビル（旧JPビル）建設のため、地上権を買い取りたいとの申し入れは大変ありがたかった。

昭和35年1月、「室三ビル」は竣工した。当時周囲にはまだ4階建てのビルでも少なく、白い壁は朝夕、日に映えた。18.81坪の土地に「鉄筋コンクリート造り陸屋根屋階付４階建て」。お隣の海苔販売店“渕田”さんとの共同ビル（合計30坪ほどのビル）で、その東側部分の所有となるが、3階には狭いながらも住居を持ち、昭和32年4月に嫁いできた“光子”との職住一体の生活を送り始めた。

父は戦前、岩附町、十軒店町と商いが大きくなるにつれ、店を移転していったが、当時は無論、



昭和20年代の日本橋室町三丁目
（■部分が小堺商店、■部分が昭和35年に3代目本社となる地）


醫藥品統制
株式會社株券


日本生藥統制
株式會社株券

土地は借物であった。大阪・道修町と並び称せられ江戸時代より同業集合の薬種問屋街、東京日本橋の“まん真ん中”に土地とビルを所有できたことは誇らしかった。

先代たちの作った「十友会」という薬種問屋の旦那衆会合は、次世代になって「あづま会」と名を変えたが、一端（いっぱし）の経営者となってからも、仕事に遊びに今でも「ちゃん」付けで交流できるのは汗と機械油の混ざったあの手の匂いを互いに覚えているからだろう。

「宇津商事」の“宇津勝三郎”君とは常盤小学校から東京薬学専門学校まで同級生、同じ趣味のクラシック音楽に夢中になったものだ。

兄弟のように年齢の近かった“須釜松雄”と“亀雄”の叔父たちは店の隣に富士鉄粉を興した。

番頭格であった三羽烏の“小堺正吉”、“須田廣蔵”、“櫻井晏”も時代を感じ取って独立していった。彼等の興した会社は繁盛したものの、三社とも大手同業他社に吸収合併されて今はなくなってしまった。

大衆薬品が全盛期となった時代に3人とも羽振りは良く、毎年正月には阿佐ヶ谷の住居にともに集まることは父の亡き後も欠かさずに続けていた。

現在、日本橋室町にあった「小堺薬品産業」（小堺政吉が起こした会社）の跡地に王診療所が開院しているが、先代の王院長は「ここはお宅の親戚のあった場所だよね！どこがイタイの？」と社員が治療に訪れるとよくこう声を掛けてくれたものだ。

長らく父と私に仕えてくれたのは“仲村清一”だった。彼は父の甥にあたり、私とは従兄弟同士。同郷の新潟・松代町出身で若い頃に満州に渡り、憲兵をしていた。満州陥落とともに数カ月をかけて命からがら引き揚げてきたが、伯父である“長一”が雇い入れた。王子の電気工事の作業場を買い取った倉庫の責任者として、そこに住み込み、家族を養った。

“長一”が亡くなってからも“清一”は週末に当時はまだ珍しかった配達用のダイハツ・ミゼットを駆って阿佐ヶ谷まで足しげく通ってきた。

妻の実兄“久野鍾一”（後の代表取締役専務）は昭和34年3月に妹の嫁ぎ先であった当社に入社した。実弟の経営する三浦三崎の鮪問屋「五兵衛商店」は西伊豆の「田子製氷」の森家とは古くからの親しい付き合いであった。　当時魚肉ソーセージを生産していたが、昭和37年から「マルちゃん」ブランドで本格的にインスタントラーメンの製造を始めた「東洋水産」創業者の“森和夫”さんを“鍾一”が品川に訪ねたのはその頃であり、当社との取引はこの時から始まった。

≪昭和39年東京オリンピック・パラリンピック、昭和45年大阪万国博覧会などを通じて日本の食文化は益々欧米化していく≫

ハム･ソーセージ製造会社との取引もアルコール製剤販売を機に拡がっていく。食品には使えない消毒用エタノールの代わりに食品に使える滅菌アルコールとして開発された「ハイネトレス」（日本化薬）を独占的に取り扱うことができたことは食肉加工食品製造各社とのパイプを大きく拡げる原動力となった。続いて「カードラン」（武田薬品・食品事業部）、「トレハロース（現 トレハ）」（林原商事）、「アクティバ」（味の素）などと次々と他の代理店に先駆けて取り組むことは会社の大躍進につながった。

高度成長時代より早くから販売を手がけていたこれらのヒット商品が業界での地位を上げていく底力となった。

その間、営業をバックアップしていたのが、“氏家和夫”（昭和36年11月入社、後の代表取締役専務、現監査役）である。彼は売上が伸びていくに伴い、仕入先の窓口となり、当社の信用を高めていった。また経理面を切り盛りしたのは妻“光子”である。受注発注もこなす彼女のてきぱきとした仕事ぶりは取引先・仕入先各社より評価が高かった。そんな中、最初に特約店契約を結んだのは「田辺製薬」（現 田辺三菱製薬）であった。昭和36年のことである。その後名だたる薬品会社や食品添加物製造会社の特約代理店となることもできた。当社の特長は広く仕入れ窓口を持つことであった。



昭和35年の室町三丁目交差点風景（赤枠で囲った部分が小堺化学工業）

昭和60年、一役員と仕入先が結託して得意先発行の小切手の横領事件が起きた。この時は多方面からの支援もあり、社員一丸となり、乗り切ることができた。また大きな得意先の倒産も幾度か経験した。

一方、日本橋地域の多くの団体の役員等を拝命し、生まれ育った日本橋に恩返しもできるようになった。その結果として、昭和58年に東京都から「薬事功労者知事賞」を頂けたのは大変光栄であった。

向かいのカリーハウス「博江」の“林（りん）”君は年下ながら激辛カリーが大人気で、ハーレー・ダビットソンを乗り回し羽振りが良かった。

昭和天皇をはじめ、過去将軍や伊藤博文、夏目漱石、島崎藤村などが愛用した元和元年（1615年）創業の「村田眼鏡舗」の13代目“村田長兵衛”君も年下であったが、真面目に地域の奉仕活動を年長者のように落ち着いて取り仕切っていた。

創業は延宝元年（1673年）京都にて明治天皇について東京に来たと言われる「海老屋美術店」の八代目当主の“三宅謙三”君は東京日本橋ロータリークラブへ誘い、一緒に奉仕活動にいそしんだ。

父に「一人で食べに行くのはまだ早い」と言われてしまい、明治18年創業の「てん茂」は敷居が高くなってしまったが、9歳年下の“奥田宣男”君の代になってからようやく常連になった。

名橋・日本橋の北詰にあった寿司屋横丁の一軒、老舗「すし芳」には小さい頃から家族一緒に連れて行ってもらった。日本橋川に面した座敷から石階段を降りると足を川に漬けて妹たちと遊んだものだ。

定番の昼飯は室町三丁目交差点に昭和27年に開店した「登亭」の百円鰻丼。いわば鰻のファーストフードの先駆けで、各地から人が訪れるほどの人気であった。

室町三丁目交差点都電停留所前には「日本畜犬」と「上海パン」、日本初の割賦販売8ミリ映写機の「林商会」があった。また富士越写真店もライカカメラの専門店としてマニアが集まる繁盛店であった。

戦後も室町三丁目で商売を始めた店は皆大繁盛で、また周囲には老舗の美味い店がたくさんあった。神田寄りのトンカツの「大和（やまと）」は店主が同病の糖尿病であったことから仲が良く、度々の社員との暴飲暴食を妻には内緒にしてくれた。

「さかい屋」の“坂本雄一郎”君は若いのにやり手だった。昭和50年に建ったJPビルの本社の大看板・ジョニー・ウォーカー氏のステッキ片手に歩く姿はまるで室町三丁目の交差点で信号待ちしているようで人目を引き、我が社を訪れる目印ともなった。

五街道（東海道、日光街道、奥州街道、中山道、甲州街道）の基点となった日本橋からの「通り」と常盤御門からの両国へ抜ける「本町・大伝馬町通り」の交差する室町三丁目は江戸時代から永く栄えた交差点であった。

創業から平成17年に日本橋富沢町に本社を移転するまでの87年間、その内昭和35年に建てた本社ビルでは45年間、世話になった日本橋室町。その街で経営者として人生を全うできた父と私、そして二人を支えてきた家族と多くの社員たち。誠に経営者としては良い人生を送ることができた。後はいささか心配ではあるが、妹“まつ子”の次男である“裕一郎”に託そう。

室三の横丁に吹いた風は時には厳しく冷たく、そして暖かくもあった。その心と魂は今も天高く存在し、今後も見守り続けてくれるだろう。

― 私だけが知るあの青年とともに。

時代のニーズとともに変遷できる姿勢を大切に

日本橋とともに歩んだ100年 薬問屋から食品事業への転換

100年前に薬問屋として事業を開始した小堺化学工業。
現在の食品を扱う事業へ軸足を置くようになった経緯はどこにあるのか。
節目に訪れる事業の転換期と、小堺化学工業を成長へと導いた商品や
周囲を取り巻く環境を中心に、その沿革を振り返る。

小堺化学工業の概要

小堺化学工業の歴史は、1918(大正7)年6月まで遡る。「小堺長一商店」として、当時の東京市日本橋區本石町に薬種門屋として創業。医薬品や医薬部外品のほか、化学工業薬品、試薬、香料などの製造や販売を手がけた。

昭和の時代に突入すると、資本金を何度も増資するなど、企業規模を急速に拡大させ始める。1935(昭和10)年8月、社名を「合資会社小堺商店」とし、さらに1947年10月には、現在の「小堺化学工業株式会社」と社名を変える。資本金は19万5,000円で、以後、1948年に110万円、1963年に220万円、1965年に330万円と増資し、1987年には4,000万円となり現在に至っている。

拠点も本社を東京都中央区日本橋室町に構えるほか、1948年には東京都北区王子に「王子倉庫」を開設。1971年4月に大阪府高槻市(現在は大阪市西区阿波座)に関西営業所、1991年4月に静岡市沓谷(現在は静岡市駿河区泉町)に静岡営業所を開設。市場の規模も拡張しつつある。

薬問屋から食品事業に舵を切る

創業当時の主な事業は、医薬品の取り扱いであり、日本橋區本石町に構える店舗で医薬品を販売していた。

その後仕入先である製薬会社が食品添加物を製造していたことから、食品添加物も取り扱うようになる。

1938年に製産を開始した、醤油の防カビ剤として商品名「パラコール」(現パラベン)という椰子油の脂肪酸を販売した。椰子油が原料で、粉末を水に溶かして油状とし、醤油の表面に張ることで空気と遮断してカビを防ぐというもの。醤油に発生する「産膜酵母」という酵母菌の一種に効き目があることから、全国的に製造・販売に至るまで販路を拡大した。同時に醤油醸造業界へは珪藻土を使用した濾過剤なども販売した。

ほかには人工甘味料の「ズルチン」や「サッカリン」を販売していた。当時は列車に乗って商品を売り歩き、リュックサックにサッカリンを背負って出かけ、帰りはそれに現金を詰めて帰ってきていた販売担当者が少なくなかったという。

パラコールの製造は特定の人に依頼して自家製産したが、その後、戦時中に椰子油を南方から取り寄せるのが難しくなったことから、製造を中止することとなる。終戦後、原料となる椰子油を潤沢に取り寄せられるようになったが、食品衛生法の改正によって市販するのが難しくなったため、防カビ剤の販売を再開することはなかった。

ほか、当時の飲料はストレートジュースより「5倍希釈」型のコンクジュースが主流で、消費者が購入した直後のジュースには何も問題はないが、フタを開けてから時間が経過してしまうとカビが生えるケースが多発した。

こうした経緯で販売を始めたのが商品名「ネオキーパー」という防カビ剤だ。ネオキーパーはパラオキシ安息香酸ブチルと炭酸ナトリウムを混ぜてできた商品。原料のパラオキシ安息香酸ブチルは、水に溶けない性質のため、半ば強引にアルカリ性にし、溶かすというより“分散”させて使用していたという。なお、ネオキーパーは現在も自前で製産し、粉末状にした商品を販売している。

事業が順調に推移する中、1923(大正12)年の関東大震災、さらには戦時中に店舗を焼失するなどしたが、こうした逆境に屈することなく地道に成長を続けた。

そんな中、大きな事業転換を迎える。初代社長から会社を引き継いだ二代目社長が、食品添加物を取り扱う比重を徐々に高めていくことになる。食べ物が不足しがちだった当時、消費者の食べ物への関心が高まる中、事業としての成長が見込めると判断したのが大きな要因だ。高度成長に伴って食品業界の規模が拡大し、その市場に参入することで企業としての成長を目指すことになる。

特に戦後は洋食文化が国内に浸透し、そこでは多くの食品添加物が使われていた。食品業界の中でも、「隙間産業」と言われる食品添加物を中心に扱うようになった。

清涼飲料水向け人工甘味料などの取り扱いを開始

1955(昭和30)年になると、事業の中軸は薬品から食品添加物へほぼシフトしていた。そんな中、取り扱いを開始したのが、清涼飲料水に関連する添加物だった。特に戦後は「甘味」を求める声が多く、こうした社会のニーズに応えることで確実に事業を成長へと導くようにした。

当社が当時、扱っていたのが粉末香料、チクロ(サイクラミン酸ナトリウム)、クエン酸、ブドウ糖など。

粉末ジュース原料は、当社の事業を大きく成長させた商品の1つだ。人工甘味料を使えば、簡単に美味しいジュースを作れたことが背景にある。ジュースに使われる粉末は主成分である



昭和23年頃配布した小堺化学工業の手拭

COLUMN-1

平成28年度薬事功労者厚生労働大臣表彰

公益社団法人東京薬事協会 副会長として薬事衛生の普及及びその向上と、奨学生選考委員長として薬事関係業界で指導育成の功績が認められたことにより、2016年10月21日に「薬事功労者厚生労働大臣表彰」を厚生労働省本省講堂にて受賞しました。




表彰状
小堺裕一郎殿
あなたは本年における薬事衛生の分野において業務に精励され国民保健の向上に寄与された功績は誠に顕著なものがありますのでここに表彰します
平成二十八年十月二十一日
厚生労働大臣 塩崎恭久

ブドウ糖の他、甘味剤として有名なチクロ、クエン酸や香料を加え、スプレードライと呼ぶ製法で作られている。果汁は一切入っていなかったという。当社が扱う添加物は、添加しても1/1000、1/2000という非常に微量を扱うのが一般的。例えばサッカリンに限れば500倍に希釈して使われている。チクロは約40倍の添加量であったため、扱い数量も多くなり事業をけん引する主力商品となる。

また、氷イチゴや氷メロンにかけるシロップやクリームソーダなどに使われているのも、人工甘味料や香料が中心。こうした需要があったことから、取引先を増やしていったのもこの時期だ。

添加物業界自体はわずかな量を扱う故、必ずしも大きくなかったが、その中でも当社は取扱商品を増やし順調に成長を続けた。

ハム・ソーセージ製造業界への取り組みを開始

清涼飲料水は確実な需要が見込めるものの、清涼飲料水が売れる夏場にしか取扱量が増えないことから、季節を問わず売れるものを展開することに主眼を置き始めた。その結果、ハムやソーセージ向けにカラギーナンやアルコール製剤などさまざまな新商品の提案や開発などを手がけることとなる。

そんな中、1955(昭和30)年になると魚肉ソーセージのブームが訪れる。

得意先が魚肉ソーセージを販売する上で欠かせなかったのが、魚肉ソーセージを覆うフィルムであった。フィルムがないと低温流通できないことから、当社では魚肉ソーセージ用の添加物と塩化ビニリデン樹脂(クレハロンークレハ化学《現クレハ》)の包装資材取り扱いを開始。魚肉ソーセージのブームが去った後も、ウインナーなどの加工品が登場し、洋風文化が進んだことで、当社の事業も堅調に推移していくことになる。ハムやソーセージなどの畜肉加工品には、添加物が欠かせない。また、当時は今では当たり前とも言える加圧加熱殺菌処理をしていなかった。そのため、食品を腐らせないようにする保存料、防腐剤が欠かせなかった。こうした状況が当社で取り扱う商品の需要を喚起することとなった。ハム・ソーセージメーカーの得意先との取引も増え、いろいろな提案をしていくことで関係を深めていった。業界における問屋としての地位を確実に築いていった。

環境意識の高まりを受けてアルコールを取り扱う

環境に対する意識が高まり始めた時勢に沿い、アルコールの取り扱いにも乗り出した。アルコールを使用して工場の殺菌に使うのが主な用途だ。初代社長の1950(昭和25)年頃は味噌やわさび漬などに「ソルビン酸」を含むアルコールを販売していた。二代目社長の1970年頃、食品製造において消毒用エタノールを殺菌用として使用していたが、税金が高く高価であったため、使用が限られていた。その中で登場したのが不可飲処置を施したアルコール製剤であり、ほぼ1社製造であったため、代理店である当社は食品会社との取引を増やす分岐点となる。

1975年頃にはアルコールは推定30～40%のシェアを持つ事業を後押しする商品となった。

その後、当時の管轄である通産省の規制緩和によりアルコールの製造会社が増え今日に至る。

薬と比べて食品、とりわけ添加物のような取引量の少ない商品の場合、利益率は必ずしも高くない。スケールメリットを出して大量に売るのはもちろん、調達できない場合は他社から購入して流通させるなどの工夫を施し、売上を徐々に引き上げていった。狭い市場を取り合うのではなく、市場自体が拡大していることから、当社を代理店として、自社商品を提供して商品を流通させたいと考える仕入先が少なくなかった。大手食品メーカーへと成長した企業との取引も多かった。

COLUMN-2

薬祖神社とは?

1929(昭和4)年に上野の五条天神社から薬祖神(やくそしん)の御霊を東京薬種貿易商同業組合に迎えたおりに、薬祖神社(初代社殿)が事務所建物の屋上に、1983年には昭和薬貿ビル屋上に二代目の社殿が造営されました。
その後、二代目社殿の老朽化に伴い、江戸時代から続く「くすりの街」として益々の発展と地域の活性化のためにと2016(平成28)年9月28日には、「福徳の森」に御社殿を新しく建立し、三代目の薬祖神社(東京都中央区室町2丁目5-10)が遷座されました。
新しい薬祖神社には、当社の玉垣も寄進されています。







COLUMN-3



▶▲イラストの中で、当主三代の似顔絵に加えて、立て看板に社名の変遷を表現したり、建物の住所表記が当社のものになっていたり、三代目の愛犬・フリーデンが描かれていたりするなど、遊び心溢れるデザインに仕上げています



シャッター絵に秘められた「日本橋朝之景」への想い

本社、新社屋の顔として「シャッター絵」があります。この作品は、創業100周年事業の1つとして新社屋移転時に制作されました。シャッター絵に採用したイラストは、当社のシンボルとして使用していた歌川広重(東海道五十三次)の「日本橋朝之景」オリジナル版に、当社三代の当主(小堺長一、榮一、裕一郎)の似顔絵などを取り入れ、リデザインしたものです。



シャッターの下から横一枚ずつ丁寧に貼り付けます





制作デザイナーとともに

小堺化学バージョンの「日本橋朝之景」には、全8カ所に当社の想いが託されています。

1. 黒塀に会社の現住所
2. 小堺長一商店の立て看板
3. 小堺商店の立て看板
4. 小堺化学工業株式会社の立て看板
5. 初代 小堺長一
6. 二代目 小堺榮一
7. 三代目 小堺裕一郎
8. 三代目の愛犬 フリーデン

大阪・静岡への進出
市場や取引を拡大

1971（昭和46）年になると、新たな拠点を構えることになる。それが大阪営業所だ。仕入先や問屋との関係が確立している市場に後発で参入するため、拠点設置当初は苦労が絶えなかったという。市場も狭いことから、市場を荒さないでほしいという現地業者の思惑もあったに違いない。

当時はオイルショックの影響で、潤沢に物資を調達するのが難しい時代。大阪営業所も、売りたくてもモノがない状態だったことから、東京から商品を送ってもらい、実物を使って商品を売り歩いた。主にアルコールや増粘剤などを扱った。

また、主力商品だったハムやソーセージは、大阪にハムやソーセージを扱う大手食品メーカーが多かったことから、主力3社との連携や商品開発を模索するため、営業担当者は何度も足を運んだという。得意先の従業員が昼食に出かけるときに声をかけたり、研究室のスタッフに朝一番で挨拶したりと、人間関係を構築するために四苦八苦した。

大阪府高槻市にあった関西営業所を1977年に大阪府南区（現中央区）に移転し、また得意先とより緊密な関係を構築すべく、1991（平成3）年静岡市沓谷（現静岡市葵区）に静岡営業所を開設。その後、仕入先各社が来社しやすいように2009年静岡駅近接の静岡市駿河区へ移転している。その頃になると、仕入先各社が当社を訪れるようになった。わずか数年で、仕入先が当社を必要とするといった関係になるまで成長することができた。

代理店の存在

当社の歴史を語る上で外せないのが、仕入先との代理店契約だ。添加物製造会社は問屋と代理店契約を結ぶケースがある。契約を結ぶ理由として、製造会社は代理店を通じて販路拡大が図れ、代理店は製造会社を通じて顧客を紹介してもらう、という双方にとってメリットが得られるためである。

食品業界を中心に、さまざまな企業の代理店として展開していくことで商品の流通や販売を効率化できるようになった。仕入先の中には競合という関係も少なくない。事前に経緯を説明するなどして、関係にひびが入らないよう配慮した。大豆タンパクなどの商品を新たに扱いだすようにし、得意先が望む商品を潤沢に流通させるようにしていった。

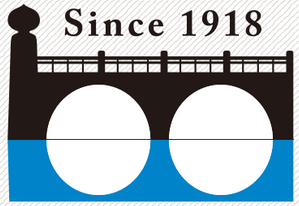
過去の取引実績が
現在の当社の素地に

時代のトレンドが新たな商品を生む。当社は、こうしたニーズを追随することで消費者の要望に応え、確実に成長してきた。新たな商品は新たな取引先を生み、その積み重ねが、現在の事業を大きく支えているといっても過言ではない。取り扱ってきた1つひとつの商品、取り引きしてきた企業との関係、積み重ねこそが、当社が営んできた100年に蓄積されている。

食品添加物業界の市場は、過去100年を見ても急速に成長してきたわけではない。しかし、その市場において事業を確実に成長させることができたのは、ニーズを読み取る力とコツコツと商品を販売してきた努力があったからに他ならない。これは売上の推移にも表れており、1996年度に70億円、2008年度に80億円、2015年度は 90億円と順調に推移してきた。100周年でもある2018年度には100億円を突破し、更なる売上拡大を目指している。

COLUMN-4

100周年ロゴのデザインコンセプト



創業100周年を記念して作られた100周年ロゴは、
日本橋をイメージしてデザインされています。

- 日本橋の擬宝珠を数字の「1」に見立てています。
- 現在の日本橋を日本橋川の水面に映し、眼鏡橋として「00」を表現しました。「00」の間にあるセンターラインは、水面（みなも）を表したものです。またマリンブルーは当社のコーポレートカラーでもあります。

社是

品質・品性・品格

1. 高い「品質」の商品を提供する

卓越した商品を発掘、目利きし、真実を伝える
≪当社の代表電話番号の4701には先達の「品（しな）は一番（いちばん）」の思いが込められている≫

2. 社員の「品性」を養う

公平に、驕らず、謙虚に、顧客・仕入先・上司・部下・同僚に敬意を払う

3. 会社の「品格」を鍛える

社会からの信用を培う

～ 社是に込められた社長の思い ～

社是は、創業100年を迎えた2018年に、社長の年頭の挨拶で掲げられました。
最も大切な「三つの品」（品質・品性・品格）を、
常日頃から社員に身につけてほしいという思いが込められています。

HISTORY

1918-2018

小堺化学工業 飛躍の100年

会社の動き

社会 業界の動き

1918

1918.6（大正7年）
小堺長一商店創業
（東京市日本橋區本石町）
医薬品卸売業として創業

1923.9.1（大正12年）
関東大震災（翌日の日本橋魚河岸）


◀中央区沿革図集 提供

1918.7（大正7年）
米価高騰による米騒動

1929.10（昭和4年）
世界恐慌（ニューヨークのウォール街株価大暴落）

1935.8（昭和10年）
合資会社小堺商店設立
（東京市日本橋區十軒店町）

1941.12（昭和16年）
太平洋戦争開戦

1945.8（昭和20年）
第2次世界大戦終結

1947.10（昭和22年）
小堺化学工業株式会社設立
（東京都中央区日本橋室町）
資本金19万5千円

1948（昭和23年）
王子倉庫開設（東京都北区王子）
資本金を110万円に増資

1950（昭和25年）
JAS法施行

1947（昭和22年）
食品衛生法制定、食品添加物という言葉が誕生

1935（昭和10年）
築地市場開場
（1966年撮影）


朝日新聞社 提供▶

1957（昭和32年）
水道法により水の消毒を義務化

1958.12（昭和33年）
東京タワー完成


日刊スポーツ新聞社 提供▶

1960.11（昭和35年）
本社を新築し、移転
（東京都日本橋室町3-3-5）



1963（昭和38年）
資本金を220万円に増資

1965（昭和40年）
資本金を330万円に増資

1968（昭和43年）
資本金を660万円に増資

1971.4（昭和46年）
関西営業所開設（大阪府高槻市宮野町）

1971.7（昭和46年）
資本金を1,000万円に増資

1977.9（昭和52年）
大阪営業所を移転改称
（大阪市南区長堀橋）

1983.11（昭和58年）
王子倉庫新築（東京都北区王子）



1971.7（昭和46年）
コンビニエンスストアの日本第1号店開店

1973.10（昭和48年）
第1次オイルショック

1976（昭和51年）
外食産業市場規模が10兆円を突破

1979.2（昭和54年）
資本金を2,000万円に増資

1979（昭和54年）
第2次オイルショック

1983.4（昭和58年）
東京ディズニーランド開園

1987.10（昭和62年）
資本金を4,000万円に増資

1989.4（平成元年）
消費税導入 税率は3%

1989.12（平成元年）
日経平均株価・史上最高値

1991.3（平成3年）
バブル崩壊

1991.4（平成3年）
静岡営業所開設
（静岡市沓谷）

1995.1（平成7年）
阪神・淡路大震災

1997.4（平成9年）
消費税率引き上げ、税率5%へ
食品衛生法改正
（ポジティブリスト制度導入）

2004.2（平成16年）
大阪営業所移転
（大阪市西区阿波座）

2005（平成17年）
個人情報保護法施行
第1回B-1グランプリ開催

2005.3（平成17年）
本社移転
（東京都中央区日本橋富沢町2-6）



2007.2（平成19年）
第1回東京マラソン開催

2008.9（平成20年）
リーマン・ショック

2009.11（平成21年）
静岡営業所移転
（静岡市駿河区泉町）

2011.3（平成23年）
東日本大震災

2012.5（平成24年）
東京スカイツリー完成



2014.4（平成26年）
消費税率引き上げ、税率8%へ

2015.9（平成27年）
本社移転
（東京都中央区日本橋富沢町11-7）



2018.6（平成30年）
創業100周年

2018


▲朝日新聞社 提供

1964.10（昭和39年）
東海道新幹線開通
東京オリンピック開催

小堺化学工業のメセナ活動（社会貢献）

THOUGHT —日本橋への思い—

当社のメセナ活動には、2011（平成23）年に立ち上げた「お江戸日本橋伝承会」と2016年から始めた「日本橋富沢町 樂琵会」という二つの文化活動があります。

創業百周年を迎えるにあたり、お世話になった日本橋への感謝を込めて、これらの活動内容をお伝えします。

お江戸日本橋伝承会

日本橋が大好きな仲間で毎月集い、日本橋文化を伝承する会が2011年から始めた「お江戸日本橋伝承会」（以下、伝承会）です。

十数年前の日本橋は今では考えられないほど、閑散としていて人や店の賑わいなど感じられない街でした。ご存知の通り日本橋は金融の街で、銀行群では15時になるとシャッターが下り、17時には人がほとんどいない状況で、老舗の当主や日本橋で働く人々の大きな悩みでもありました。

そのため、街をいかに活性化するかという勉強会が日本橋のあちこちで盛んに行われており、格調が高いイメージから気楽に「のれん」をくぐれるお店にならなくてはと皆で討論したものです。そんな中、「めぐりの会」という老舗を巡る会が結成され、これが伝承会の前身となりました。

ところで、「東都のれん会」という老舗の会があります。加盟会則は「三代、百年、同業で継続し、現在も盛業であること」とあります。東京の小売業なら、憧れの「東都のれん会」です。

その中でも多くを占める日本橋の老舗は、「不易流行」という言葉通りの日本橋の街づくりを始めました。人で賑わうから町に活気が出て、その結果お店が繁盛するということを第一目標として多方面での活動が始まりました。その後、コレド室町を中心とする再開発により、日本橋にも活気が戻ってきました。「福徳神社」が再建され、鎮守の森を挟んでお隣には、日本橋本町が東日本の医薬品の発祥の地であることを示すシンボルである「薬祖神社」まで鎮座する街へと変化していきました。

しかしながら、まだまだ多くの方にとって老舗の「のれん」をくぐるには勇気が必要でした。伝承会の参加者は勇気を奮って老舗の「のれん」をくぐり、一度お店で会話を交わすとすっかり虜になってくれます。日本橋は「のれん」をくぐる勇気さえあれば、本当に楽しい街です。そんな橋渡しに少しでもお役に立てればというのが、この「お江戸日本橋伝承会」の発足の理由でした。

毎月毎月気が付けば8年以上の月日をかけ老舗について学び、交流し、老舗との距離を近くし、お店へ足を運んで頂くための情報提供活動を継続してきました。このように参加者が気軽に老舗へ足を運びその素晴らしさを伝承していくことで、街づくりのお手伝いができた気がします。

この十数年で、日本橋は大きく変わりました。日本橋を愛する人々が、活性化に協力し、地元企業の街づくりと相まって、見えないベクトルが日本橋に吹く風となり、仲間が集う街へとなってまいりました。これこそが、本来の日本橋が求めている姿のような気がします。

この「お江戸日本橋伝承会」という学び舎も日本の文化の伝承へと少し方向転換しつつあるように思います。

伝承会講師の皆様



講師 第49回 2016年6月20日
文楽人形遣い **吉田勘彌**氏



講師 第52回 2016年10月5日
榮太樓總本鋪 相談役 **細田安兵衛**氏



講師 第61回 2017年10月4日
江戸消防記念館 第一組二番組 組頭 **小泉太郎**氏



講師 第64回 2018年2月7日
江戸手妻師 **藤山新太郎**氏

日本橋富沢町 樂琵会

琵琶演奏家の塩高和之氏と出会い、東京では琵琶を制作しているところがすでに1軒しかないことを知りました。琵琶という楽器を広め、定点に行ったら必ず琵琶演奏が聴ける場所を作りたいという彼の熱意によって、2016年2月より、当社のMPホールで「日本橋富沢町 樂琵会」（以下、樂琵会）の活動が始まりました。定期的にさまざまなジャンルの楽器奏者とのコラボを行っており、琵琶はもちろん龍笛・尺八・ヴァイオリン・能や語りとほかでは聴くことができないサロン会です。30～40名で至福の時を過ごす90分。五感で楽しんで頂くために、演奏後は琵琶に触ることはもちろん、弾くことも体験できます。

絹にウコンを染みこませた弦の音色や余韻は、デジタルでは感じることができない音の世界です。

参加される方は圧倒的に邦楽の好きな方が多いのですが、3年目になり「琵琶の音色を聴いたことがないので是非」という来訪者も増え、少しずつですが、当初の目的を達成できてきたと思っております。長いスパンでより多くの方々に琵琶の魅力が伝わることが目標です。

また、樂琵会には素晴らしいゲストが毎回お見えになり、目の前で人間国宝の津村禮次郎先生までが参加してくださるほかでは経験できないような五感で体験するサロンへと確実に進化しております。

（文責：社長室長 小堺ひとみ）



樂琵会主宰者の塩高和之氏（写真左）と
人間国宝の津村禮次郎先生（写真右）

お江戸日本橋伝承会

https://www.kosakai.co.jp/denshokai.html

通算	開催日	テーマ	講師
第1回	2011年2月2日（水）	日本橋鮒佐の歴史と佃煮について	日本橋鮒佐 4代当主 宮内隆平氏
第2回	2011年3月2日（水）	何故老舗は成長力を失わなかったのか	三井文庫 文庫長 由井常彦氏
第3回	2011年5月11日（水）	衣を通じて江戸を知る	竺仙 5代当主 小川文男氏
第4回	2011年6月1日（水）	古陶磁の収集と歴史	繭山龍泉堂 川島公之氏
第5回	2011年7月6日（水）	雄・雌・食物で違いが出る毛筆	有便堂社長 石川雅敏氏
第6回	2011年9月7日（水）	日本銀行の広報ー日銀に広報なんて?!	前日本銀行情報サービス局長 大川昌利氏
第7回	2011年10月5日（水）	楊枝の話	さるや 8代当主 山本一雄氏
第8回	2011年11月2日（水）	うぶけや よもやま話	うぶけや 8代当主 矢崎豊氏
第9回	2011年12月7日（水）	忘年会「凧の博物館見学とたいめいけんのオムライス作り」	会場:たいめいけん たいめいけん 2代目社長 茂出木雅章氏
第10回	2012年2月1日（水）	江戸経済を支えた寺院と僧侶たち	歴史家 安藤優一郎氏
第11回	2012年3月7日（水）	歌舞伎 今と昔	三井文庫 文庫長 由井常彦氏
第12回	2012年4月4日（水）	ガラス物語	タナチョー 社長 田中廣氏
第13回	2012年6月6日（水）	海苔のお話し	山本海苔店 社長 山本徳治郎氏
第14回	2012年7月4日（水）	源氏物語と薫り	日本香道 顧問 香文化研究所 代表 保科儒一氏
第15回	2012年9月5日（水）	江戸屋の刷毛とブラシ	江戸屋 12代当主 濵田捷利氏
第16回	2012年10月3日（水）	2013年の大河ドラマ『八重の桜』の先取りとヒロイン新島八重の秘話	歴史家 安藤優一郎氏
第17回	2012年11月7日（水）	江戸手妻	江戸手妻師 藤山新太郎氏
第18回	2012年12月5日（水）	忘年会「スペインをまるごと食べ・学び・歌いましょう」	会場:スペインクラブ銀座 スペインクラブ銀座 総支配人 松伊望氏
第19回	2013年2月6日（水）	狂言で鎌倉散歩	和泉流狂言師 深田博治氏
第20回	2013年3月6日（水）	歌舞伎の女形	三井文庫 文庫長 由井常彦氏
第21回	2013年4月3日（水）	歌舞伎の大向うの世界	歌舞伎大向う 寿会会員 佐久間由明氏
第22回	2013年6月5日（水）	サムライ弁蔵千疋屋総本店	千疋屋総本店 社長 大島博氏
第23回	2013年7月3日（水）	浮世絵から見た江戸時代	伊場仙 14代当主 吉田誠男氏
第24回	2013年9月4日（水）	江戸名物は火事・喧嘩・伊勢屋・稲荷に犬の糞	にんべん 取締役総務部長 高津龍太郎氏
第25回	2013年10月2日（水）	人形振りと寿三郎平家物語を語る	人形師 辻村寿三郎氏
第26回	2013年11月6日（水）	鮨と寿司のよもやま話	吉野鮨本店4代 吉野正二郎氏
第27回	2013年12月4日（水）	忘年会「イタリアンで年忘れ」	会場:銀座イルボネンティーノ
第28回	2014年2月5日（水）	伝統をいかに生かすか	江戸手妻師 藤山新太郎氏
第29回	2014年3月5日（水）	花火の話 昔、今、将来	丸玉屋 代表取締役社長 小勝敏克氏
第30回	2014年4月2日（水）	知ってそうで知らない漆器の世界	山田平安堂 社長 山田健太氏
第31回	2014年6月11日（水）	江戸は何故、醤油文化なのか	分とく山 総料理長 野崎洋光氏
第32回	2014年7月2日（水）	ー亡き小林次郎を偲んでー『悉皆屋が学校の先生になるまで』 ー藍の生葉叩き染め体験ー	にしきや（布礼愛工房） 小林しのぶ氏
第33回	2014年9月3日（水）	デジタルで製作された江戸明治の江戸の地勢地図	地歴プロデューサー 小島豊美氏
第34回	2014年10月1日（水）	人類のコミュニケーションメディアの変遷	ミズノプリンティングミュージアム館長 水野雅生氏
第35回	2014年11月5日（水）	講談に見る武士の忠義	講談師 神田真紅氏
第36回	2014年12月3日（水）	忘年会「魚河岸日本橋 魚を学び、食す体験をしましょう!」	会場:日本橋快海 日本橋快海 代表 石居弘司氏
第37回	2015年2月4日（水）	男芸者と遊ぶ	幇間芸 悠玄亭玉八氏
第38回	2015年3月4日（水）	大河ドラマ『花燃ゆ』より「吉田松陰とその家族たち」	歴史家 安藤優一郎氏
第39回	中止	素顔の池波正太郎	文筆家・池波正太郎の書生 佐藤隆介氏（鉢山亭虎魚）
第40回	2015年6月3日（水）	すみだ川と柳橋花柳界	元東京柳橋芸妓組合代表、日本舞踊家 西川春喜久氏
第41回	2015年7月1日（水）	床山のよもやま話	東京鴨治床山株式会社 兼務取締役 那須正利氏
第42回	2015年9月2日（水）	江戸浄瑠璃 ～豊後節 常磐津～	邦楽家・6代目 常磐津 駒太夫氏
第43回	2015年10月7日（水）	最高のおもてなし ～心を尽くしたおもてなしはお客様に必ず届く～	日本橋高島屋コンシェルジュ 敷田正法氏
第44回	2015年11月4日（水）	とよだのよもやま話と日本橋の街作り	日本橋とよだ 4代当主 橋本敬氏
第45回	2015年12月2日（水）	忘年会「落語で笑い・ドイツ料理で歌い・語りましょう」	会場:ドイツバル&ビストロ プレッツェル
第46回	2016年2月3日（水）	今蘇る古（いにしえ）の音色 ～シルクロードから現代まで、琵琶の色々～	琵琶奏者・作曲家 塩高和之氏
第47回	2016年3月2日（水）	テレビ童謡のあゆみ 今こどもはどんな唄をきいてるのか?	子供番組音楽のプロデューサー 小島豊美氏

通算	開催日	テーマ	講師
第48回	2016年4月6日（水）	歌舞伎よもやま話 初日を開けるまで	歌舞伎役者 中村時蔵氏
第49回	2016年6月20日（月）	文楽 人形遣いの修行	文楽人形遣い 吉田勘彌氏
第50回	2016年7月6日（水）	空間デザインと町の仕掛け	アーティスト・空間デザイナー グラフィクス アンド デザイニング代表 相羽高徳氏
第51回	2016年9月7日（水）	日本の食文化 日本人と鰻の関係	伊勢定 代表取締役会長 富田蓮右衛門氏
第52回	2016年10月5日（水）	戯れ言、粋の話と日本橋街づくりあれこれ	榮太樓總本鋪 相談役 細田安兵衛氏
第53回	2016年11月2日（水）	江戸の食と酒のよもやま話 ～江戸の町で広まった外飲食～	民俗学者 旅の文化研究所所長 神崎宣武氏
第54回	2016年12月7日（水）	忘年会「フラメンコ聴いて踊って年忘れ」	会場:銀座イルボネンティーノ フラメンコギター・歌：増井建一氏　ダンス：増井みどり氏
第55回	2017年2月1日（水）	170年ぶりに日本橋に江戸切子が復活! そもそも江戸切子とは…	江戸切子の店 華硝 熊倉千砂都氏
第56回	2017年3月1日（水）	はじめてなのに なつかしい… ～篠笛をきいてみましょう～	横笛奏者 松尾慧氏
第57回	2017年4月5日（水）	平家物語 ー語りと波紋音ー ～こんなに面白い!祇園精舎、那須与ー～	語り:金子あい氏 波紋音:永田砂知子氏
第58回	2017年6月7日（水）	狂言の語りの芸「奈須与市語」を観る	狂言師 深田博治氏
第59回	2017年7月5日（水）	お香と写経のワークショップ	曹洞宗 香澤山安洞院 住職 横山俊顕氏
第60回	2017年9月6日（水）	江戸より今に伝わる「江戸凧」の話し	江戸凧師 土岐幹男氏
第61回	2017年10月4日（水）	江戸町火消のあれこれ	江戸消防記念会 第一組二番組 組頭 小泉太郎氏
第62回	2017年11月1日（水）	深くて、楽しくて、ちょっとだけ怖い、古代文字 ー漢字のルーツを知ったら　必ず誰かに話したくなる!ー	古代文字アーティスト 天遊氏
第63回	2017年12月6日（水）	忘年会「たいめいけんでハワイア～ン」	会場:たいめいけん たいめいけん 2代目社長 茂出木雅章氏
第64回	2018年2月7日（水）	江戸手妻氏が伝えたいこと	江戸手妻師 藤山新太郎氏
第65回	2018年3月7日（水）	住まいが人を造る	建築家（古民家） 瀧下嘉弘氏
第66回	2018年4月4日（水）	江戸写し絵について	劇団みんわ座代表・江戸写し絵師 山形文雄氏
第67回	2018年6月6日（水）	中国陶磁ー唐時代のやきもの	繭山竜泉堂 代表 川島公之氏
第68回	2018年7月4日（水）	江戸文字のお話	津多屋商店 3代当主 加藤木大介氏
第69回	2018年9月5日（水）	いけばな「華道の楽しみかた」	一葉式いけ花 次期家元 粕谷尚弘氏
第70回	2018年10月3日（水）	なぜ日本人は「のし袋」をつかうのか?	折形師 齋藤和胡氏
第71回	2018年11月7日（水）	後世に伝えたい歌舞伎について	三井文庫 文庫長 由井常彦氏
第72回	2018年12月5日（水）	忘年会「イルボネンティーノでドュ・マルシェと忘年れ」	会場:銀座イルボネンティーノ ドュ・マルシェ バイオリン：牧千穂子氏 アコーディオン：ミヤック氏

日本橋富沢町 樂琵会

https://www.kosakai.co.jp/rakubikai.html

通算	開催日	テーマ	ゲスト
第1回	2016年2月25日（木）	琵琶色々 とにかく聴いてみよう 樂琵琶・平家琵琶・薩摩琵琶 ～シルクロードから現代まで、琵琶の色々～	
第2回	2016年4月21日（木）	薩摩琵琶と筑前琵琶の聴き比べ	平野多美恵氏（筑前琵琶奏者）
第3回	2016年6月16日（木）	現代琵琶学	田中黎山氏（尺八奏者）
第4回	2016年8月18日（木）	夏の定番『耳なし芳一』	古屋和子氏（語り手）
第5回	2016年10月20日（木）	秋の調べを聴く	大浦典子氏（篠笛・龍笛奏者）
第6回	2016年12月15日（木）	冬の定番『勧進帳』掛け合い語り	古屋和子氏（語り手）/津村禮次郎氏（特別ゲスト・能）
第7回	2017年2月16日（木）	筑前琵琶と薩摩琵琶 聴き比べ	鶴山旭翔氏（筑前琵琶）
第8回	2017年4月20日（木）	琵琶と尺八の出会い	吉岡龍見氏（尺八）/津村禮次郎氏（特別ゲスト・能）
第9回	2017年6月15日（木）	『方丈記』を語る	伊藤哲也氏（語り）
第10回	2017年8月17日（木）	平家琵琶と薩摩琵琶	古澤月心氏（平家琵琶）
第11回	2017年10月19日（木）	秋の調べを聴く～ 樂琵琶と龍笛	大浦典子氏（龍笛）
第12回	2017年12月21日（木）	琵琶掛け合い語り	平野多美恵氏（筑前琵琶）/津村禮次郎氏（特別ゲスト・能）
第13回	2018年2月15日（木）	現代の琵琶楽CD『沙羅双樹Ⅲ』発売記念	田澤明子氏（Vi）吉岡龍之介氏（尺八）
第14回	2018年4月19日（木）	樂琵琶の響き	大浦典子氏（龍笛・篠笛）
第15回	2018年6月21日（木）	薩摩琵琶 古典から現代へ	石田克佳氏（正統薩摩琵琶・琵琶制作者）
第16回	2018年10月18日（木）	薩摩琵琶と筑前琵琶聴き比べ	田原順子氏（筑前琵琶）
第17回	2018年12月13日（木）	琵琶掛け合い語り	平野多美恵氏（筑前琵琶）/津村禮次郎氏（特別ゲスト・能）

日本橋歳喰記

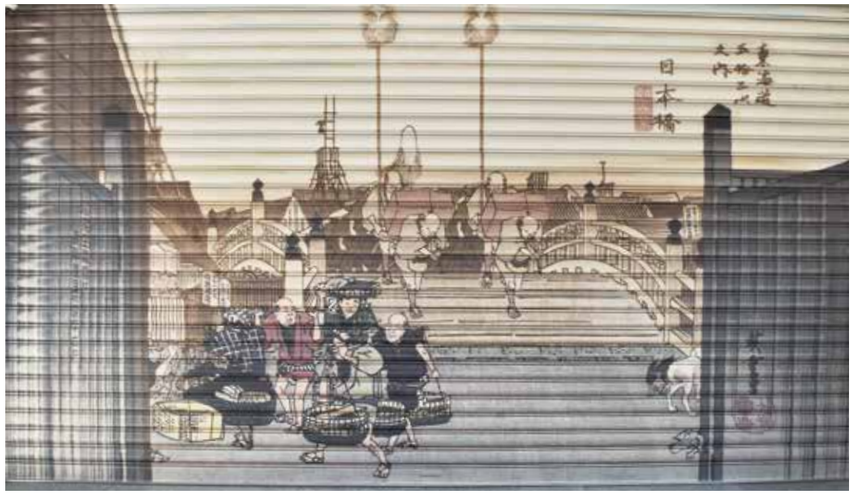
サラリーマン川柳なるものが流行って久しい。サラリーマンの喜怒哀楽に満ちた、自虐的な川柳は今も人々に共感を得ている。川柳は俳句と違って季語も必要なく誰にでも作ることが可能である。世相や風俗などが盛り込まれているので古い川柳からは当時の様子をも知ることができる。昔の日本橋を表した「三丁目 饅頭の外苦い見世」という川柳が残っている。

ここで言う三丁目とは日本橋本町三丁目のことである。当時本町、室町界隈は薬種商の多い町として知られ将軍吉宗の時代にも44軒の薬種問屋があったと記録されている。「良薬口に苦し」の言葉通り昔から薬は苦い物であることは通り相場である。文字通り苦い見世（店）とは薬種問屋の店舗のことである。小堺化学工業の前身である小堺長一商店も薬種問屋として百年前にこの界隈を創業地として産声を上げている。饅頭の外の饅頭は東都本町三丁目と看板を上げていた御菓子調進所「鳥飼和泉」を指している。当時浅草待乳山「鶴屋」の米饅頭、今も残る老舗「塩瀬」等と並ぶ饅頭の名店として知られ大いに繁盛していたと聞く。その苦い薬を売る薬種問屋の町に甘味を売る有名店があり、苦い薬と甘い物の代表である饅頭を対比させた川柳である。「鳥飼は下戸の建てたる蔵ばかり」。こんな川柳も残っている。当時日本橋はいろいろな商家が並ぶ江戸随一の商業地でもあったと言われている。小堺化学工業現本社駐車場のシャッターには江戸期の日本橋の風景が描かれている。モチーフとなっているのは安藤（歌川）広重による保永堂版東海道五十三次日本橋である。「お江戸日本橋七つ（4 時）立ち」と歌われているように江戸の人々は早朝暁の頃に日本橋を出発して旅に出た。保永堂版五十三次日本橋の浮世絵はそんな朝の風景である。どこかの大名行列らしい一行が橋を渡っている。橋の東の袖が魚河岸なので威勢の良い河岸の連中が仕入れた魚を天秤棒で担いでいる。東海道の宿場町を描いた広重の浮世絵は大変な人気を博した。広重は実際に東海道を旅したと言われているが各地で食べ物のことをよく書き込んでいる。江戸っ子の広重はなかなかの食通であったらしい。娘のお辰（広重の養女）が広重の好物を書いた覚書を残している。それによると赤貝のさんばい、鮃のさしみ、鮃のぬた、細魚の吸い物、鰊締め、湯豆腐等と書かれている。湯豆腐にいたっては塩焼きにした鯛を鍋に入れ煮立ったところに豆腐を加えるという凝ったものだったらしい。ある時広重が赤貝のさんばいと青菜の胡麻和えを酒の肴に飲んでいた。珍しいことに貝の中から真珠が出てきて縁起が良いと喜んで紙入れに入れ、その後持ち歩いていたという話もある。とかく人の集まる所には美味しい食べ物も集まってくる。日本橋界隈には江戸や明治、大正から受け継がれてきた味を頑固に守り続けている老舗も多い。その味と人情にほれ込んで通い続ける人々がいる。そんな小堺化学工業本社のある東京日本橋界隈の美味しい店をご案内できればと百年史委員会よりの要望であった。

酒落好きな江戸っ子よろしく日本橋界隈の一年を仮想食レポとして楽しんで頂く。

そんな気持ちでご案内するとこんな感じになりそうである。

日本橋の歴史文化、周辺の食事処を四季に合わせてご紹介できればと思う。



小堺化学工業本社の顔となっているシャッター絵。
広重の絵に当社の初代・二代目・三代目の似顔絵、立て看板に社名、黒塀に住所等を入れ込んである

正月

新年を迎え最初に界隈が賑わうのは三越、高島屋両デパートの初売りであろうか。

食で言うならば三越本店の食堂は「お子様ランチ」発祥として知られていて今でも子供連れの客で賑わっている。今年も「日本橋七福神めぐり」を楽しんでみよう。七福神めぐりとは一定の地域にて七福神を拝した神社仏閣などをお参りして御朱印等を頂きながら巡るというものである。江戸期発祥と言われ時の文化人たちが七福神の福徳を授かるようにと考えた趣向とも言われている。日本橋七福神の場合は比較的短時間で巡れることで人気がある。小網神社（福禄寿・弁財天）、茶の木神社（布袋尊）、水天宮（弁財天）、松島神社（大黒神）、末廣神社（毘沙門天）、笠間稲荷神社（寿老人）、椙森神社（恵比寿神）、寶田恵比寿神社（恵比寿神）の八社となる。人形町駅を起点としてまずは甘酒横丁にて自家製豆腐で知られる「双葉」の店頭で売られている甘酒で暖を取り、お昼は「玉ひで」にて行列覚悟で親子丼を食べようか。「玉ひで」は軍鶏鍋の名店であるが親子丼の元祖と言われていてお昼の親子丼目あてにできる行列は人形町名物ともなっている。お土産は「玉英堂」の玉饅頭か「人形町亀井堂」瓦煎餅を買い求めようか。玉饅頭は白い大きめの饅頭を割ると中が５色の層になっている珍しい饅頭である。亀井堂の瓦煎餅は地元で人気であるが特に茶壺をかたどり挽き茶の砂糖掛けを手塗りしたものがお薦めである。美味しい菓子がたくさんあるが今日のところは七福神めぐりにちなんで人形焼に決めよう。また人形町と言えば人形焼と言われるほどで七福神の型で焼かれた「人形焼の板倉屋」。餡子たっぷりの人形焼で知られる「重盛」は東京銘菓としても知られている。さて七福神めぐりが終われば夕食時、正月なので奮発してすき焼きでも食べようか。界隈には小伝馬町の「伊勢重」、「人形町今半」と名店は多いが今日は「日山」の２階に上がってすき焼きに舌鼓を打つことにしよう。伊勢重は東京でも最も歴史のあるすき焼き店。人形町今半は浅草の老舗今半の暖簾分けですき焼き、しゃぶしゃぶのほか、肉総菜等にも力を入れている人気店である。「日山」はすき焼き割烹で知られる名店で文化財の日本建築の建屋は風情がある。



株式会社 日山
設立は1912（大正元）年。
都内で唯一木造3階建ての建物である。
明治の昔や大正ロマンに思いをはせて、古き良き風情を残した店内で鍋を囲むすき焼きの名店

春

春３月４月ともなれば日本橋界隈でも花見ができる。染井吉野より一足早く「おかめ桜」という変わった名前の桜が日本橋室町と本町の町境となる通りに咲き始める。十恩公園は江戸時代の伝馬町牢屋敷跡にあり吉田松陰終焉の地として知られるが春には桜が綺麗である。桜祭りも開催され有名なのは人形町甘

酒横丁桜まつり、浜町緑道の桜並木は見事で甘酒などがふるまわれる。二八会さくら祭りは八重洲北口から茅場町へ続く桜並木のライトアップで地元店舗を含む屋台が出店して夜遅くまで花見の宴で盛り上がる。花より団子の言葉もあるが桜見物の華やかな雰囲気に酔った今夜は江戸前鮨を楽しみたい。界隈には鮨の名店も多くある。江戸前の伝統を受け継ぐ人形町「𠮷寿司」。鮪のトロを鮨に握った元祖と言われている日本橋「吉野鮨本店」。いつも客で賑わっている老舗の「太田鮨」「舟寿し」「たぬき鮨」「繁乃鮨」、新店ではあるが正統派の「鮨一條」「つの田」とどこにしようか迷ってしまう。今宵は当社の添友会ゴルフコンペにも参加して準優勝歴もある江川淳一郎氏が代表を務める「矢の根寿司」で江戸前鮨を楽しもう。室町の本店のほか蛎殻町のロイヤルパークホテル内にも支店がある。そうそう我が家への手土産は「山本海苔店」の焼き海苔と「にんべん」



𠮷寿司
江戸前鮨の始祖と言われる両国「与兵衛鮨」の流れをくむ、伝統的な技法を凝らした正統派江戸前鮨が味わえる名店

のかつお節も忘れずに買い求めよう。山本海苔店は東京で味付け海苔を最初に販売した老舗、にんべんは江戸から続くかつお節専門店で、不活性ガスを充てんした削りたてのフレッシュパックで知られている。

初夏

江戸城を氏子に持ち天下祭りと言われた神田祭りの祭礼が終わると初夏を迎えることになる。夏も近づく八十八夜の茶摘み歌が口ずさまれる新茶のシーズンでもある。緑茶も良いが人形町の「森乃園」でほうじ茶を買い求めよう。森乃園は自家製焙煎のほうじ茶にこだわり、店の前を通るとほうじ茶の香ばしい匂いに誘いこまれる。今日は涼を求めて日本橋の橋下にある船着場からクルーズと洒落込もう。各コースがある中で隅田川めぐりのコースを選んでみよう。まずはガイドの方から日本橋が装飾に費用をかけてこだわった橋である説明がある。日本橋には獅子（ライオン）の顔の彫刻が片側に16（4×4＝獅子）あり橋全体では32（8×4＝橋）あると笑いを取る。日本橋の下をくぐり日本橋川から隅田川に出ると清洲橋越しにスカイツリーがそびえ立つ。川の上からでなければ見えない絶景に歓声が上がる。おなかも減ってきたところで何を食べようか。そうだ初夏の季節を味わえる天麩羅が良い。明治初期屋台から始まった天麩羅の名店「てん茂」ではこの季節貝柱のかき揚げや蕗鮎の天麩羅が味わえる。中でも夏の名物は房総産の鮑の天麩羅で肝も揚げてそえられる逸品である。



てん茂
季節による旬を味わえるのが天麩羅の醍醐味。屋台から始まる江戸前天麩羅の伝統を今に伝える名店

夏

梅雨も明け盛夏を迎える頃になる。あつらえた浴衣を「竺仙」に取りに行くのを忘れずに、「伊場仙」にて江戸団扇も見に行こう。お世話になった方に扇子でも差し上げようか。日本橋には日本国道路元標があり、各地から東京まで何キロと表示される場合は東京のこの地点までということになる。現在の道路元標の文字は佐藤栄作元総理のものとされている。

ちなみに日本橋にある日本橋の文字は徳川最後の将軍徳川慶喜による筆である。

軽井沢名物で行列ができることで知られる「ミカド珈琲店」日本橋本店のアイスコーヒーとモカソフトでまずは涼を取ろう。さて昼飯は土用丑の日も近いことだし夏のスタミナ食でもある鰻重と行きたい。日本橋には鰻店が多く「いづもや」「大江戸」「高嶋屋」「喜代川」「近三」、いずれ劣らぬ老舗の名店である。道路元標に近い三越デパート前の「伊勢定」にて鰻を堪能することに決めよう。伊勢定の会長富田蓮右衛門氏は鰻組合の会長も務めた業界の重鎮であり、当社の主宰する「お江戸日本橋伝承会」で講師を務めて頂いたこともある。帰りがけには忘れずに江戸から続く東京唯一の楊枝専門店「日本橋さるや」へ寄って鰻好きにはたまらない鰻の形をした楊枝を買い求めることとしよう。



「日本国道路元標」は江戸における五街道の出発点であった日本橋に埋め込まれており首都東京において7幹線国道の起点となっている

秋

残暑も去り朝夕の風にも涼しさを感じる季節を迎えたと思う間もなく秋は深まる。日本橋を代表する縁日と言えば「寶田恵比寿神社のべったら市」である。漬物のべったら漬を販売する屋台を中心に多くの夜店が立ち並び地元の住民、会社帰りの人たちで大いに賑わう。べったら漬は江戸を代表する高級漬物で大根を麹漬した甘味のある漬物である。地元「新高屋」のべったら漬と秋の味覚サツマイモをかたどった和菓子「壽堂」の黄金芋を土産にしよう。食欲の秋でもあり今日はがっちりと洋食で腹ごしらえをしよう。日本橋には洋食の名店も多い。ビーフカツの「キラク」「そよいち」、通常とは一風変わったカツ丼を提供する「小春軒」、座敷で座って洋食を食べる「芳味亭」。いずれも思い浮かべるだけで食欲をそそられる。悩むところだがお江戸日本橋伝承会の忘年会にも利用させて頂いたことのある「たいめいけん」と決めよう。ビルの２階へ上がって名物の小皿料理も良いが、１階にて映画「タンポポ」に登場したケチャップライスにトロトロオムレツを乗せたタンポポオムライス。それにサービス価格のボルシチとコールスローを注文しようか。社長の茂出木雅章氏は日本凧の会の会長で凧のコレクターとしても知られ、同店のビル５階には日本初の「凧の博物館」がある。食後のデザートには日本橋「千疋屋総本店」にて秋の果物を物色しよう。千疋屋総本店は1834年創業の果物店で品質の良い高級フルーツを扱うことで知られている。

冬

日増しに寒さも増してきて冬支度とともに暮れから正月の準備とあわただしさも増してくる。「薬研掘不動院」では12月末になると正月飾りなどを売る市が開かれる。日本橋には蕎麦の名店も多く今年の年越し蕎麦はどの店にしようか。室町「砂場」、同じく室町の「利久庵」、日本橋「藪伊豆総本店」、茅場町「長寿庵」、蕎麦好きならハシゴも良いかもしれない。正月のおせちには「神茂」の紅白御蒲鉾、江戸っ子なら伊達巻も忘れてはならない。「日本橋鮒佐」のスズメ焼き、昆布巻もお重に詰めたい。神茂はハンペンやおでん向けの水産練り製品の老舗で、日本橋鮒佐は元祖佃煮として知られている。

そんなことを考えながら今夜は親しい友と数少ない江戸割烹の店「日本橋とよだ」で忘年会を楽しもう。日本橋とよだの主人で料理人である橋本享氏は居合剣術「無外流吹毛会」の会長を務める剣士でもある。忘年会に付き物はお酒であるが江戸日本橋新川と言えば江戸の昔から、全国から美味い酒の集まる所でもあった。今でも日本橋には「宝酒造」はじめ酒造会社の事務所も多い。そうそう、母親への土産にと頼まれていた「榮太樓總本鋪」の梅ぼ志飴を忘れずに。

一年を駆け足でご案内させて頂きましたが、日本橋にはまだまだ紹介したい美味しいお店がたくさんあります。小堺化学工業へ是非お立ち寄り頂き、その際は界隈で江戸の文化や情緒に触れてみて頂きたく思います。もちろん社長以下小堺化学工業社員がご案内させて頂き、皆様のお越しをお待ちしています。

美味しいものを是非ご一緒させて頂ければ幸いと思いながら。

（文責：営業部長 青木知廣）

小堺化学工業の“当時”を呼び起こす

歴代の盟友たちが100年を振り返る

小堺化学工業が営んできた100年。
その重みを現在の社員やOBはどう感じているのでしょうか。
これまでの歴史を振り返るとともに、
小堺化学工業に受け継がれる資産やDNAについて語ってもらいました。



青木 知廣
取締役営業部長
入社年度:1977年4月
（41年目）

吉田 蓮次
OB 元神羊商事社長 元営業部
入社年度:2004年4月
（勤続11年）

小堺 裕一郎
代表取締役社長
入社年度:1979年2月
（39年目）

氏家 和夫
元代表取締役専務 現監査役
入社年度:1961年11月
（57年目）

三好 智幸
OB 元大阪営業所所長
入社年度:1964年6月
（勤続38年）

人間関係を大切にして乗り越えてきた転換期

――100年の歴史を持つ小堺化学工業。脈々と受け継がれる文化や社風、社員の特徴とはどのようなものでしょう。まずは小堺社長に、社の歴史の中で転換期とも言うべき時期について伺いたいと思います。

小堺：当社は、創業時は薬種問屋でした。初代が新潟から出てきて知識をつけて日本橋で独立したのが大正７年です。その5年後には関東大震災で壊滅的な打撃を受けました。そこからなんとか復興したところ、今度は戦災にあって、二度の危機に遭遇することになります。戦後になると、薬の販売流通は変わり、薬種問屋は業態を変えるところが多くなりました。しばらくすると、食文化が顕著に欧米化していき、高度成長期になって、食品業界が益々大きくなってきたわけです。これまで日本で余り消費されていなかったハム・ソーセージなどの畜肉加工品の製造が増え、食品添加物が必要になってきました。

――食品添加物を使うことで、美味しくて簡単に作れる商品が増えていった時期ですね。

小堺：そういう状況の中で、二代目が食品業界に参入し、食品添加物を主要取扱商品とするようになったのです。これが当社の大きな転換期だったと言えるでしょう。現在、食品工業関連資材全般を扱った事業ができているのは、この時の転換があったからです。日本橋という商業の中心地で事業を営んでいたおかげで、ネットワークもありましたから、新規参入しやすかったのでしょう。

――取り扱いのあった食品添加物について思い出はありますか？

氏家：うま味を感じる製品で、L-グルタミン酸ソーダというものがあります。何にでもふりかけていた時代がありましたね。昭和36年頃までは、グルテンなどのタンパクを酸分解して製造していたので非常に高価で、１kgあたり1600円ぐらいしました。それがサトウキビから発酵させる、安価な方法が生まれ、昭和52年には700円にまで下がりました。製造方法が変わり、価格も変動していった例です。また、5’-リボヌクレオチド二ナトリウムという、うま味調味料の原料となるものも非常に高価でした。昭和36年頃の価格は、１kgあたり３万円ほど。大卒の初任給が１万数千円の時代です。この頃は、この商品を金庫に保管したところもありました。それも昭和54年頃には、１万3000円ぐらいになりました。

食品添加物を手がけるようになってからも薬の販売は続けており、昔からの製薬会社とのつながりで、取引があった会社から当社に社員として迎えた方もいます。

吉田：私のことですね。製薬会社で営業を担当していた私は、問屋さんを開拓する仕事をしていて当社と出会いました。その縁で、定年後、前職の関連会社を経てこちらでお世話になったのです。外からも中からも小堺化学工業という会社を見たことがある立場です。

――どのようにご覧になっていましたか？

吉田：外から小堺化学工業を見ていたときに思ったのは、「取引先を捕まえているな」ということでした。つまり、取引先に非常に深く入り込んでいて、付き合いが深いということです。

小堺：我々は、得意先と同様に仕入先との関係も大切にしていて、大切な仲間として付き合うようにしています。商品をお貸し頂いているという気持ちで信頼関係を維持することを心がけています。

――では、入社されてからはどんな会社だと感じられましたか？

吉田：当社は売上が順調に伸びていますが、その理由が外からではよくわからないのです。決して伸びている業界とは言えないのに、なぜだろうと疑問に思っていました。入社してみて、その秘密は社風にあるとわかりました。社員が正直で真面目だから、得意先との折衝がうまくいっているのです。

氏家：私は当社で営業、総務、業務と数々の部署を経験し、現在は監査役として勤めています。当社が伸びている理由は、吉田さんが言ったことにプラスして積み上げてきた「歴史」だと思いますね。ただ、東京では業界で名前が売れていても、三好さんのように大阪進出で苦労した社員もいます。

三好：私は昭和48年に大阪の営業所の二代目所長として大阪に移り住みました。営業所兼住宅という環境で、毎日のように取引をしたい会社に通って頑張りました。やはり人間関係を結ぶことからですね。少しずつ成果が出てきて、最初は高槻にあった営業所も、心斎橋近くの大阪の中心街に移りました。開拓するやりがいもあり、友達もできて、楽しかったですよ。

――１つひとつの人間関係を大切にすることが、小堺化学工業の大切な伝統なのですね。

先輩から受け継ぐ営業スタイル 個性を強みに成長

――現役の営業担当者としてはどのようなことを考えてお仕事をされていますか？

青木：私は現在営業部長として勤務しています。入社直後は先輩方から得意先や仕入先との接し方、交渉の進め方など、たくさんのお話を聞きました。先輩方の営業の姿勢が、私の営業スタイルの下地を築いてくれたといっても過言ではありません。

――その下地に、時代に合わせた方法を加えていったのですか？

青木：はい。時代とともに当社を取り巻く市場は大きく変化しています。社会や得意先のニーズを逐一とらえて事業に反映させるために、先輩方のアドバイスやノウハウに加えて、独自の営業スタイルも確立させていくよう心がけました。こうした積み重ねが、次の若い世代に受け継がれ、時代やニーズを追随する営業スタイルに変革していくのだと考えます。

目まぐるしく変動する食品業界において当社が成長し続けられたのは、先輩方から受け継いだ資産が根底にあったからだと思います。また、それを軽視せ



ず、きちんと活用しようとする社員がいたことも大きいのではないでしょうか。

――社長は自社の営業についてどう思われますか？

小堺：青木部長は私より社歴が２年長い先輩です。私も営業活動していた時期があり、先輩から多くを学びました。いろいろな得意先や仕入先と接する機会が多く、先輩だけではなく社外からも多くを学べる環境が、当社の強みにつながっていたのだと感じます。当社のファンと言いますか、当社を好きでいてくださる得意先と仕入先を多くすることが業績につながります。

――それは嬉しいことですね。得意先とはどのように関係を築いていったのでしょうか。

小堺：得意先と、その先にいる最終ユーザーである消費者に喜んでもらうことを優先し、仕入先とともに商品をどう販売すべきかを親身になって考える。これに尽きるのではないでしょうか。いろいろな意見を出し合っていく中で、徐々に関係を深めていくケースは多かったですね。こうした姿勢から、得意先からはよく、「小堺化学工業さんの営業は“野武士”の集団みたいだ」と言われていました。

――「野武士」とは、どういう意味でしょう。

小堺：私自身、野武士というのが誉め言葉なのかどうかよくわかりません。ただ、「小堺化学工業の営業担当者は、決まりきったことしか言わない他の会社の営業担当者とは違う。仕事に幅があって魅力的だ」とも言われていました。個性があり、いろいろな意見やアイデアを提言する社員の姿勢が、野武士と評されたのかもしれませんね。

――得意先との関係を深める秘密は、そこにあるのかもしれませんね。

小堺：得意先は当社の営業担当者を個性的と解釈し、それを良い方向にとらえてくださいました。それは、これまで先輩方がコツコツと積み上げてきた得意先との関係や経験があるからだと思います。

社長である私が営業スタイルを変えていこうと意見するより、得意先や仕入先が小堺化学工業の営業を育ててくれたのだと思います。それが当社のDNAとして引き継がれているのかもしれませんね。

――今の若い世代にも個性は育まれているのでしょうか。

氏家：社員１人ひとりの責任は、以前にも増して重くなっているように感じます。当社の場合、各自が責任を持って業務に取り組むケースが多いのです。１人ひとりがいわば“小堺”という看板を持った「商店主」と例えることができます。その思いが売上という成果に結びついているのかもしれません。

極論ですが、自由放任主義ならば、各自はそれなりの成果をもたらすでしょう。当社の社員はそれだけ責任感の強い人が多い。しかし、それだけではビジネスは成立しませんし、小堺化学工業の社員として、１つ屋根の下で一緒に働く意味がありません。社員と社員が手を取り合い、一緒になって考えて解決していく。歴代の先輩方はこうした強みも当然築き上げてきています。個の強みと協調する強みを状況に応じて使い分け、打ち出せることが、小堺化学工業の持つ力と言えますね。

日本橋が小堺の支え
地元へのこだわりを武器に

――営業担当者はもとより、小堺化学工業の社員は、「これまで積み上げてきたものを背負っている」「歴史を汚してはならない」という思いが強いと感じます。

小堺：先輩方が積み上げてきた当社の実績や評価を傷つけてはならないと考える社員は多いと思います。これまで蓄積したノウハウが武器になっていると実感しているからでしょう。

――積み上げてきたものの中には「日本橋」という土地への思いも含まれるのでしょうか。

小堺：私だけでなく、諸先輩方、そして現在の社員も含めて、皆日本橋には特別な思いを持っています。現在当社の事業は、全国から仕入れた商品を全国に向けて販売しているため、「日本橋」というブランドを必ずしも背負う必要はないかもしれません。しかしそれでも、日本橋に拠点を構えることに強くこだわっていきたいと考えています。

――それはなぜですか？

小堺：日本橋は昔から商業の中心でしたし、今なおビジネスの中心であると思います。日本橋には多くの人が行き交い、その中で得られる情報も豊富です。日本橋で事業を行うことは、「交差点」に位置していることだと思うのです。我々はこれまで先輩方から引き継いだものを日本橋から発信し、そこを通過する人々と情報を共有していきたいと考えます。日本橋でしか得られない経験や情報は、小堺化学工業の成長の源泉なのです。日本橋が小堺化学工業という会社と社員を育ててきてくれたのだと考えています。

――日本橋への思いが伝わってきます。

小堺：我々は、日本橋で事業を100年営んできたことを誇りに思っています。小堺化学工業は日本橋だからこそ100年間も事業を営むことができたのです。日本橋で事業を展開するのと地方に拠点を構えて事業をするのとでは、どのくらい収益や費用対効果に影響するのか予測するのは難しいですが、日本橋に会社を構え続ければ、得意先や仕入先との関係はもちろん、社員のモチベーションを維持・向上することも可能であると考えます。商業の中心地で100年間営み続けたことを評価してくれる得意先や仕入先もあるでしょう。その評価を失わないためにも、当社はこれからも日本橋に強くこだわり、事業をさらに飛躍させたいと考えています。この思いは、歴代の社長、さらには諸先輩方から受け継がなければならない資産であると認識しています。

小堺化学工業で培われる
DNAと積み重ねた経験を
人生に還元

――皆さんの“小堺スピリット”を教えて頂けますか？

三好：得意先は何を望んでいるのかを考えること、そのために小堺化学工業が実行すべきことを考えること。得意先の期待に応えようとする姿勢こそが小堺化学工業のスピリットだと思います。

小堺：仕入先と一緒になって得意先の希望を満たす。得意先と仕入先の橋渡し役となるのが当社の使命ではないでしょうか。橋渡し役としての責務を果たそうとする考え方が当社の社員には根付いているように感じます。

――顧客第一を裏付けるエピソードはありますか？

三好：得意先が望む商品があれば、是非形にしたいと思っていました。仕入先と試行錯誤しながら開発したり、時には取引のない遠方の仕入先まで足を運んだりしました。こうした取り組みは、我ながら一生懸命やっていたかなと思います。

氏家：例えば、当社が扱う商品を100円安く販売しているところがあったとします。この時、上司に「100円安い会社があるのですが…」と相談して判断を仰ぐのは必ずしも正解ではありません。時には自己判断で対応し、その上で上司に了承を得るというアプローチも必要なのではないでしょうか。もちろんケースバイケースです。すべての状況において自己判断せよと言うつもりはありません。こういう状況になったらどう動くか、自分が上司の立場だったらどう決断するかを考え、自分が成長する上で何がプラスなのかを常に考えることが大事なのではないでしょうか。

吉田：自分自身をブラッシュアップし続ける姿勢が小堺化学工業のスピリットだと思います。仕入先、得意先などと話しているときの状況は千差万別。その時々に応じた対応力が社員には求められるのです。対応力を身につけるためには、普段からの情報収集はもとより、自分をさらに高める意識を持ち続け



座談会



ることが必要です。その意識が小堺化学工業の社員には培われているのではないかと感じます。

青木：社員全員が一丸となって会社を支えるという姿は、望ましい形の１つと言えるでしょう。例えば社長が「繁忙期に向けて頑張ろう」と言ったときに、社員全員が「はい」と返事するのは当然かもしれません。でも当たり前ととらえてしまうと、違うことをするのが難しくなってしまう。いつもと同じこと、誰もがやることとは違う取り組みの積み重ねが大事だと思うのです。それが個々を育み、いろいろな考えやアイデア、ノウハウとして会社に還元されていくのが好ましいと考えます。

――しかし、それでは各自が違う方向を向きかねないのでは？

青木：何も考えず、「はい」と応えるのが当たり前と思ってしまうことが問題なのです。何かを聞かれたら周りの回答に合わせようとするのではなく、会社として何をすべきかを考えることが一番重要です。さらに言えば、考えを少しでも行動に移すことも大切。そこまで踏み込むことを小堺化学工業のスピリットとして、是非植えつけていきたいですね。

小堺：私は会社を「学校」だと思っています。１日の３分の１は会社にいるのですから、寝ている時間以外の人生の大部分を会社で過ごすことになります。せっかく大事な時間を過ごすのなら、いろいろ学んでほしいですし、いろいろなことにチャレンジしてほしい。さらに部活動もやって楽しんでもらいたいと思っています。学校に入学したら、誰もがいずれ卒業します。その後の人生において、長い時間生活した「学校」での体験が、自身のスピリットとして生かせるのではないでしょうか。

――小堺化学工業で仕事をすればスピリットを養えるということですね。

小堺：当社にはいろいろな個性の人が集まり、同じ時間を共有しています。真面目な人がいる一方で騒がしい人もいる。いろいろな人の考えを体感、吸収できる場でもあるのです。こうした環境が自身の考え方に相乗効果を生み、新たなスピリットが養われていくような気がします。社員には、当社で多くを学び、経験し、新しい自分を形成していってほしいですね。一方的な意見や考え、主張に基づくのではなく、周囲からの影響を受けながら自分のスピリットを形成することが大切です。こうした環境を作ることが、経営者である私の役割だと思っています。

次の100年に向けて確実な一歩を踏み出すために

――100周年を迎え、次の100年に向けてまたスタートを切ることになります。次の100年を迎えるためには、何を実行すべきとお考えでしょうか。

三好：私はすでに小堺化学工業を離れ、現在は会社の人間ではありません。外部からの提言となりますが、女性スタッフの積極的な活用を期待します。私が現役だった頃は、必ずしも女性の活躍が目立っていなかったかなと感じております。女性ならではの視点を取り入れた「新しい小堺化学工業」に、次の100年を担っていってほしいですね。

――具体的に、女性にどのように活躍してほしいですか？

三好：研究や開発といった領域で、女性スタッフに活躍してほしいと思っています。小堺化学工業のいる食品業界に限らず、商品の研究や開発といった領域は、明確な効果を得られにくいことから積極的に投資しにくいと言われていますが、できればそこに新たなアイデアを多く注ぎ込んでほしいですね。

小堺：研究や開発、分析といった業務に、積極的に予算を投入しにくいという考えがあるのは事実です。しかし、小堺化学工業の次の100年を担う新たな事業にも目を向けていかなければなりません。そのための施策の１つとして、研究・開発領域に積極的に取り組むことは重要だと考えます。新たな時代を迎えるにあたり、会社の責務として組織の体制や女性が活躍しやすい場を作り出していくことも必要でしょうね。

三好：100年間の経験を、次の100年に生かすことを忘れてはなりません。これまでの小堺化学工業のように、「人」を起点に物事を考え、動くのが望ましいでしょう。人というのは、小堺化学工業の社員であり、仕入先、得意先といった事業を取り巻くすべての人が対象です。特にこれまで付き合いのある仕入先や得意先への恩返しの心は、なくさず持ち続けてほしいですね。これらの方たちは、次の100年も小堺化学工業を支える柱になるのですから。

氏家：人間関係が希薄と言われる現代においては、人と人とのつながりを大切にした事業を行うべきでしょう。現代は、インターネットを介して簡単に情報を得られる社会です。アナログ的な考えかもしれませんが、そんな時代だからこそ、地道に直接人と人とがつながることを大切に考えていきたいですね。

――以前と比べて、人と人との関係が希薄になっていると感じておられますか？

氏家：例えば社内に限っていうと、以前は外出先から戻ってくると、ストーブのまわりに集まって社員同士でいろいろな出来事を話していました。中には無駄話が含まれていたかもしれません。しかしそれも大事な経験になるのです。今はこうした経験を得にくくなっているように感じます。一人の経験をみんなで共有するようなシステムを構築していくことがいいのではないかなと思いますね。

小堺：経験を共有し、社員同士の関係を強くするための組織やシステムをどう構築するかは、100年の歴史を次に生かすためにも、経営者として取り組まなければならない課題だと思っています。

――事業面では、次の100年をどう進めたいとお考えですか？

小堺：当社はこれまで多くの食品添加物、食品素材を扱ってきました。その方針はこれからも大きく変わらないでしょう。一方で、特定の商品を深く扱うことにもチャレンジしたいですね。移り変わりの激しい食品業界だからこそ、息の長い商品を生み出し、「小堺化学工業と言えば」と呼ばれるほどの代表作となってくれれば嬉しいですね。

吉田：事業規模をさらに引き上げるための手段の１つとして、新規市場に参入する企業は少なくありません。しかし、当然ながら相応のリスクを伴いますし、ある程度の出費を覚悟しなければなりません。また、複数の業界に参入して事業を手広く展開するのは、一極集中によるリスクを分散するといったメリットを見込めるでしょうが、その半面、ヒト・モノ・カネといった資源が分散し、各事業が中途半端になりかねません。当社の場合、これまで少数の人員で小規模な事業を進めてきました。こうした流れは今後も大きく変わらないと思います。基本姿勢は「選択と集中」です。コンパクトながらも特定の領域に強みを打ち出し、次の100年を戦い抜いていってほしいと思います。

――そのために必要なこととはなんでしょう。

吉田：今できることを地道に取り組むのは言うまでもありません。その地道な取り組みを支えるものが、これまで培ってきた100年間の資産なのです。この歴史をしっかりと継承することで、次の100年を迎えられるのではないでしょうか。仮に業績が一気に好転したとしても、これまでの100年間を忘れないでほしいですね。「地道にコツコツ」が小堺化学工業の社風であり、強みでもあるわけですから。

伝統と実績の上に新しい小堺化学工業像を

――会社として取り組まなければならない課題はありますか？

小堺：現在はコンプライアンスが問われる時代です。これまで



座談会



の100年間は、そもそもコンプライアンスなどという考え自体確立されていませんでしたし、ここ数年を見ても取り組みは十分だったとは言えません。しかし企業として成長するためには、コンプライアンスから目を背けることはできません。食品を取り扱う以上、会社として社員教育を徹底する必要もあるでしょう。100周年を契機に、社会規範に反することなく業務を遂行する姿勢を明確に打ち出す企業として、成長したいですね。

――その取り組みが得意先に還元されるのですね。

小堺：はい。当社は食品添加物業界の中で、「今はもう扱ってない」「こんな用途は推奨していない」「これはやってはいけない」と、得意先に的確で新しい情報を提供し、提言する立場でいなければならないと思っています。それは、当社の責務だと考えます。

――「日本橋」についてはいかがでしょう。次の100年にも欠かせませんか？

吉田：もちろんです。インターネットを介して簡単に情報を探し出せる情報化社会に突入し、その傾向は益々高まっています。今後はさらに情報を収集しやすくなるでしょう。そんな時代になっても、今なお日本橋には多くの人が訪れています。インターネットでは入手することのできない生の情報に触れることができるのです。これこそが日本橋の良さです。人とのつながりから生まれる情報を大切にするためにも、小堺化学工業は日本橋に居続けるべきだと思います。

小堺：日本橋らしい企業を目指したいですね。日本橋界隈の企業の中には300年や400年続いている老舗があります。こうした企業に比べたら、当社の100年なんてまだまだ。100周年で満足せず、社員と一緒に「日本橋」の良さを打ち出せる会社づくりを推進していきたいですね。

青木：大事だと思うことが２つあります。１つは、当たり前のことを確実に積み重ねていってほしいということ。歴代の先輩方が築いたことを後輩が引き継ぎ、その経験やノウハウを大事に育んでいくことは、いつの時代でも欠かせない取り組みでしょう。これまでの小堺化学工業をきちんと踏襲した上で、まずは来年、３年、５年、10年と見据えることが大切です。積み上げた歴史に胡坐をかくことなく、「自分が歴史をさらに積み上げる」という姿勢で、大切に活用してほしいですね。もう１つは、今と反対の考えになりますが、「NEW小堺化学工業」を作り上げてほしいということです。小堺化学工業をさらに成長させるためには、これまでの100年を超えるつもりで、過去にこだわらずに突き進んでほしいですね。

――積み上げた実績と、過去にこだわらない姿勢の両方が大事ということですね。

青木：事業にはさまざまな要因が複雑に絡み合います。中には、過去の実績や経験とは相反する答えを導き出さなければ前進できないケースに直面することもあるでしょう。100年間の歴史が、時には足枷となるかもしれません。そんな時は、これまでの定石にこだわらない新手を打ってほしい。その先にはきっと、全社員が思い描く「新しい小堺化学工業像」が見えてくるのではないでしょうか。

――過去の資産を引き継いでこられた小堺社長はいかがですか？

小堺：先代、先々代から引き継いだ以上、守っていかなければならないものがあるのは事実です。しかしそれでも、攻めの姿勢を持ち続けたいですね。守り主体では事業の成長曲線を描くことはできません。些細なことでも、何かにチャレンジして「新しい小堺化学工業」を築けるようにしたいですね。

――そのための土台となるのが、これまで積み上げてきた伝統ということになるのでしょうか。

小堺：その通りです。社員から社員へと引き継がれてきた仕入先や得意先は、きちんと関係を維持しなければなりません。先輩方が築き上げた伝統を継承するため、今いるスタッフが取り組まなければならないことは多々あります。もちろん、そのための取り組みがすべて成功するとは限りません。取り組んでいく中で成功するもの、価値のあるものを見定め、１つでもきちんと伝承され、事業をけん引できるようになればと思っています。過去をきちんと伝承することが、次代の新たな事業を生み出す土台になるのではと考えます。

――社外の得意先や仕入先などに対してはいかがでしょう。

小堺：取引先と仕入先との関係は、さらに強い結びつきで事業を進められるようにしていきたいですね。仕入先や取引先企業から得られる情報は、当社にとって貴重な財産となります。こうした情報を糧に、成長が難しい業界でも、改善しながら少しずつ成長できるようにしたいと思います。

――生き残りが難しい業界で、勝ち進んでいくための秘策はなんだと思われますか？

小堺：当社のいる食品業界は、当然のように次から次に新しい商品が生まれて、消えていきます。すぐにコモディティ化し、売っても儲けが出にくいものが少なくありません。そんな中でも、当社は「商品を育てる」という姿勢を一貫してきました。１つひとつの商品を大切にし、いかに売れる商品へと成長させるかを考えています。そのためには全社員がアンテナを張り、至るところから情報を仕入れることが大切です。これも、歴代の先輩方が取り組んできた大事な伝統と言えます。現在の社員も業界内にとどまらず、全く関係ない業界にもネットワークを張っていますが、今後はさらに広げて、商品を育てるための策を講じてほしいですね。ステレオタイプではなく、いろいろなところにアンテナを張れるように、社員の好奇心を育んでいけたらと思っています。1人ひとりが収集した情報を小堺化学工業の成長に活用してほしい。次の100年に足を踏み込んでいくためには、それぞれの社員が魅力的に成長することが欠かせないのです。

――次の100年が楽しみですね。皆さん、ありがとうございました。



OB・OG 100周年アンケート

小堺化学工業の100年の歴史を創ってくれた
先輩の皆さんから貴重な応援メッセージが届きました。









宇久緑

1 1978~1982／経理・事務
2 注文の対応、未着荷物の確認、売上伝票作成等
3 ★★★★★
4 とても早く感じた
5 2時間以内
6 国内社員旅行・アットホームな雰囲気の忘年会が楽しかった
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 創業100年本当に素晴らしいと思います。心からお祝い申し上げます。これも皆様の日頃のご努力の賜物と存じます。これからも温かい小堺化学の社風そのままに、益々のご躍進を遂げられますようお祈り申し上げます。
10 ★★★★★

吉田蓮次

1 2004~2015／営業
2 営業成績を向上させたこと
3 ★★★☆☆
4 とても早く感じた
5 2時間以内
6 国内社員旅行（湯布院）
7 今までの経験を生かして頑張ろうと思った
8 覚えていない
9 継続
10 ★★★★★

伊藤忠明

1 1965~2001／営業
2 営業成績を上がるように努力したこと
3 ★★★☆☆
4 普通
5 1時間以内
6 国内社員旅行（北海道）・海外社員旅行（タイ）社内ゴルフコンペ（添友会）・仕事後の麻雀
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 上場できるように頑張ってください
10 ★★★★★

河村恵子

1 1973~1976、1988~2015／管理
2 働く仲間上司との関係及び、社内の雰囲気が大変良かったように感じた
3 ★★★★☆
4 普通
5 1時間以内
6 国内社員旅行（北海道・九州）「きくの家」で貸切で行った忘年会・社内演奏会
7 わくわくもし、とても緊張した
8 一人暮らしをしていたので、生活雑貨や服を買った
9 100周年おめでとうございます。社員の皆様一人一人の努力により会社は大きくなると思います。そして皆が仲良く会話のできる会社であって欲しいです。小堺化学さんの社風大好きでした。
10 ★★★★☆

鹿瀬政樹

1 1963~2008／王子倉庫管理・運送・配送業務
2 荷造りから商品の配達まですべて行ったこと
3 ★★★☆☆
4 普通
5 1時間以内
6 国内社員旅行（佐渡）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 100周年おめでとうございます。更なる飛躍を期待しています。
10 ★★★★☆

三好智幸

1 1964~2002／大阪営業所　営業
2 人間関係の確立
3 ★★★★★
4 とても早く感じた
5 2時間以内
6 海外の社員旅行（台湾・タイ）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 売上高100億と女性登用への体質改善の希望
10 ★★★☆☆

村上栄一

1 1990~1999／大阪営業所　営業
2 東京、大阪での営業を経験させてもらいすべてにおいて、やりがいを感じた。
3 ★★★★★
4 とても早く感じた
5 2時間以内
6 海外社員旅行（グアム）・得意先での工場研修
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 更なる飛躍を期待してます
10 ★★★★★




【質　問】

1 在籍期間／最終所属部署は?
2 担当部署で最もやりがいを感じたことは何ですか?
3 担当部署で仕事を楽しく進められましたか? ★はいくつ?
4 会社での1日の時間はどう感じましたか?
5 通勤時間はどれぐらいかかりましたか?
6 在職中で一番印象に残っていることは何ですか?
7 入社初日はどんな気持ちでしたか?
8 初任給で何を買ったか覚えていますか?
9 更なる100年を目指す小堺化学にエールの一言をお願いします!!
10 あなたにとって会社の評価は★いくつですか?




岩本和世

1 1986~1995／業務
2 オフコン導入
3 ★★★★☆
4 普通
5 2時間以内
6 海外社員旅行（台湾）　屋形船
7 とても緊張した
8 腕時計
9 次の100年も少数精鋭で頑張ってください。
10 ★★★★★

佐野征男

1 2007~2016／顧問
2 一歩一歩進められたこと
3 ★★★☆☆
4 普通
5 2時間
6 全体会議
7 営業部を改革する気持ちで入社した
8 覚えていない
9 1歩先に更なる100年がある
10 ★★★☆☆

矢野惇子

1 1984~2000／大阪営業所　業務
2 緊急注文を無事完了後、感謝されたこと
3 ★★★★☆
4 普通
5 2時間以内
6 海外の社員旅行（タイ）・国内社員旅行（北海道）
7 とても緊張した
8 家族で食事
9 皆様で力を合わせ益々のご発展をお祈りします。
10 ★★★★★

勝井次雄

1 1998~2009／管理（管理薬剤師）
2 11年間管理薬剤師として充実して仕事ができました
3 ★★★★☆
4 普通
5 2時間以内
6 海外社員旅行（タイ）・社内ゴルフコンペ（添友会）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 御社が順調に100周年を迎えられ心より お祝い申し上げます。これも偏に経営者・従業員の皆様の弛まぬご努力の賜物、今後とも更なる発展を祈願してやみません。
10 ★★★★☆

村松良美

1 1993~2010／静岡営業所　業務
2 顧客からの無理難題の解決・感謝されたこと
3 ★★★★☆
4 とても早く感じた
5 1時間以内
6 国内社員旅行（北海道）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 100周年おめでとうございます。今までの100年とは違う、テンポの速い時代に対処され、更なる御発展をお祈り申し上げます。
10 ★★★★★

北條武雄

1 1971~2005／営業
2 自由
3 ★★★★☆
4 普通
5 2時間以内
6 国内社員旅行（北海道）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 夢と希望を持って
10 ★★★★★

藤川豊

1 1998~2013／企画開発
2 取引先の売上債権に係る与信管理業務
3 ★★★★★
4 普通
5 1時間以内
6 海外社員旅行（香港）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 大正、昭和、平成三時代に亘る100年の歴史が礎となる太い根っこを育てました。新元号の時代にはより強勤な枝葉が伸びて行くことを願っています。
10 ★★★★★

久野寛

1 1973~1999／営業
2 新規開拓
3 ★★★☆☆
4 普通
5 2時間以内
6 兄や姉、よき仲間に恵まれて仕事ができたこと。
7 新規一転頑張る
8 覚えていない
9 増々の御発展祈っています。
10 ★★★★☆

村上豪將

1 1966~1974／営業
2 営業成績を上げること
3 ★★★★★
4 普通
5 1時間以内
6 国内社員旅行（磐梯山）
7 とても緊張した
8 覚えていない
9 更なる次100年に向かって邁進してください。
10 ★★★★★

COMPANY TRIP

社員旅行年表

社員同士の親睦を図るため、
国内諸外国、いろいろな場所に行きました。



1995年 グアム



1997年 北海道



1999年 群馬



2000年 タイ

1978.10 (昭和53) 静岡 熱海温泉
1980.10 (昭和55) 山梨 石和温泉
1982.9 (昭和57) 静岡 修善寺温泉
1984.10 (昭和59) 長野 上諏訪温泉
1986.9 (昭和61) 群馬 老神温泉
1988.9 (昭和63) 静岡 土肥温泉
1990.10 (平成2) 岐阜 下呂温泉
1992.10 (平成4) 台湾
1994.9 (平成6) 栃木 湯西川温泉
1996.9 (平成8) 静岡 伊豆・下田
1998.6 (平成10) 静岡 土肥温泉
2000.6 (平成12) タイ
2002.6 (平成14) 香港
2004.6 (平成16) 韓国
2006.5 (平成18) 静岡 稲取温泉
2008.10 (平成20) 九州 長崎・熊本・大分
2010.6 (平成22) 山形 蔵王
2012.11 (平成24) 福島 芦ノ牧温泉
2014.10 (平成26) 岐阜 飛騨高山
2016.3 (平成28) 島根 出雲大社
2016.10 (平成28) 神奈川 箱根・箱根小涌園

1979.10 (昭和54) 静岡 熱川温泉
1981.10 (昭和56) 栃木 奥鬼怒温泉
1983.10 (昭和58) 新潟 佐渡
1985.9 (昭和60) 静岡 蓮台寺温泉
1987.10 (昭和62) 福島 磐梯熱海
1989.10 (平成元) 宮城 南三陸温泉
1991.10 (平成3) 静岡 熱川温泉
1993.9 (平成5) 群馬 四万温泉
1995.10 (平成7) グアム
1997.6 (平成9) 北海道 トマム・知床・札幌
1999.9 (平成11) 群馬 水上温泉
2001.6 (平成13) 神奈川 湯河原
2003.6 (平成15) 群馬 伊香保温泉
2005.5 (平成17) 福島 会津
2007.6 (平成19) 千葉 鴨川
2009.6 (平成21) 静岡 淡島ホテル
2011.11 (平成23) 岩手・宮城 松島
2013.6 (平成25) 徳島・香川 渦潮・金毘羅温泉
2015.5 (平成27) 石川 和倉温泉
2017.5 (平成29) 広島 原爆ドーム・宮島・錦帯橋
2018.11 (平成30) 福井 永平寺・丸岡城



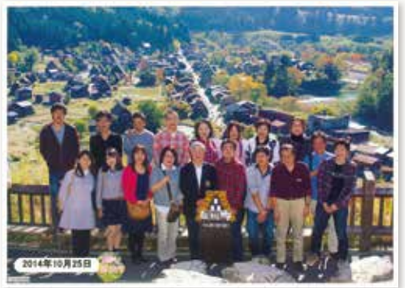
2004年 韓国



2005年 福島



2011年 岩手・宮城（平泉にて）



2014年 飛騨高山



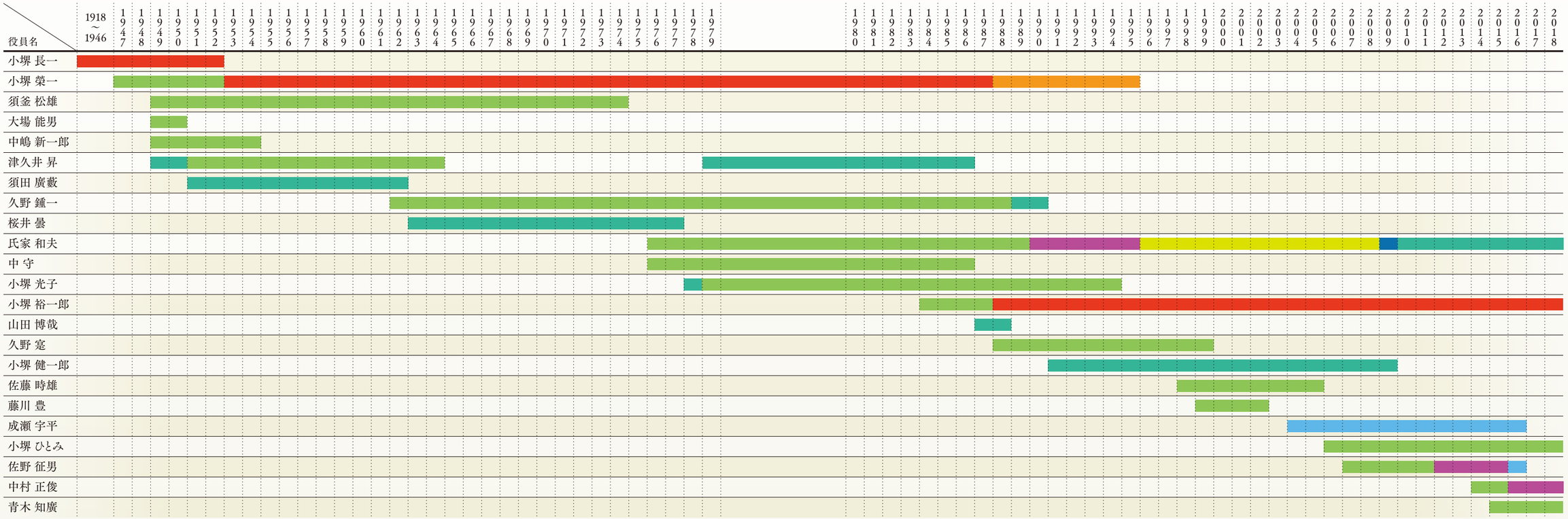
2016年 箱根小涌園

DOCUMENT

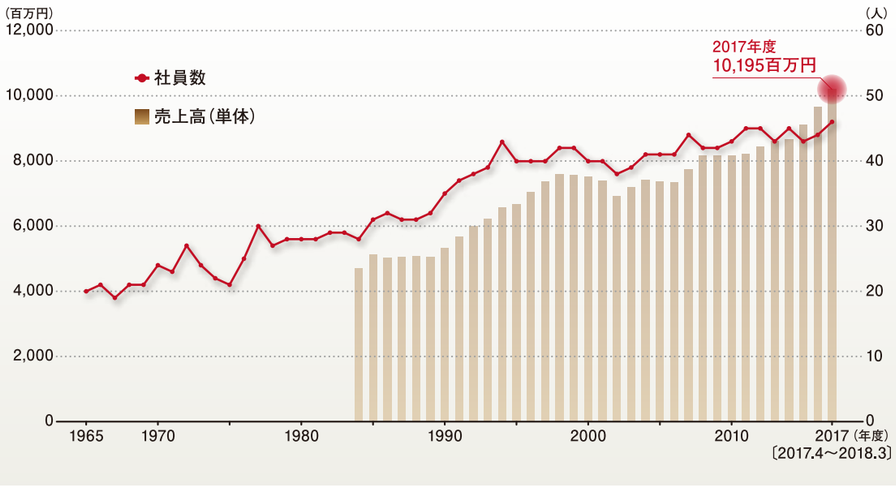
資料編

■ 歴代役員任期一覧（1918～2018年）

会長　社長　専務　常務　取締役　監査役　相談役　顧問

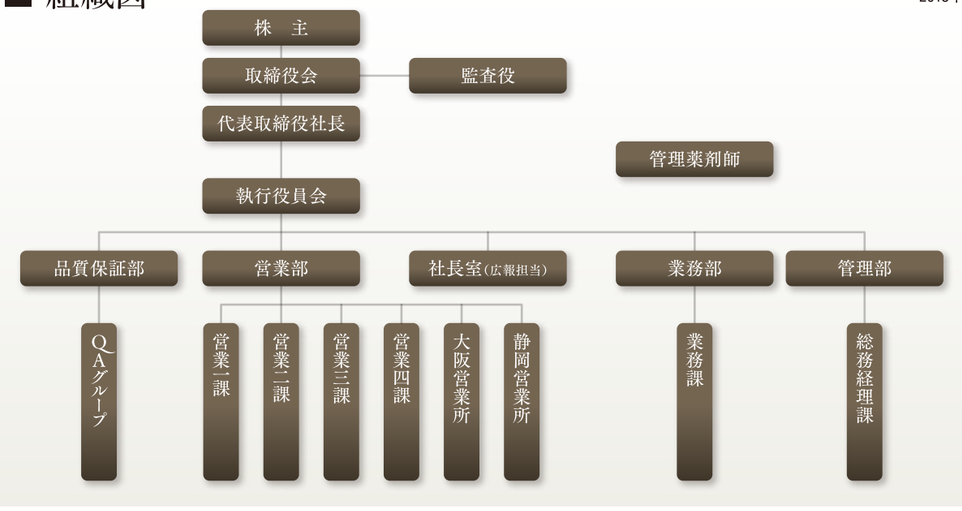


■ 社員数と売上高



■ 組織図

2018年3月









創業100周年記念パーティー

2018 年 6 月 16 日、マンダリンオリエンタル東京 2 階ヴェンタリオ（東京・日本橋）にて、創業 100 周年記念パーティーを行いました。当日は、来賓・OB・OG・社員、総勢 70 名が参加し、社長賞の表彰や百年史座談会参加者への記念品贈呈なども行われ、美味しい料理を食べながら終始和やかな雰囲気の集いでした。

















あとがき

当社が創業100周年を記念して社史の刊行を決定し、100周年プロジェクト委員会を立ち上げたのは平成 28 年 6 月。委員会メンバーは経営部門･管理部門･業務部門から各 1 名と営業部門から 2 名の計 5 名で構成しました。

社史編纂に取り組み始めた際に話題となったのが、100年もの長い歴史がある企業にもかかわらず今までに社史を作ったことがないということ。各委員会メンバーは、過去の参考例がないながらの社史編纂であったため、100周年のロゴデザインから資料の収集、OB･OGへのインタビューなど 1 つずつコツコツ進めてまいりました。

社史編纂にあたりテーマとなったのが、ただ歴史的事実を掲載する堅い内容にするのではなく、社員に向けて当社の生い立ちや歩みを伝えられるメッセージ性のある社史にする、というコンセプトでした。そこで、創業当時や現在に至るまでの経緯を当社 OB･OGや経営陣へインタビューを行い、事業のターニングポイントや発祥の地である日本橋への思いを書き記しました。

100周年の社史は限られた予算内での作成であったため、委員会メンバーによる手作り感のある仕上がりになっております。今回は100年という区切りでの制作ですが、今後も当社の発展とともに新たな歴史を社員一同協力して築き上げ、いつの日か150年史や200年史を作成する際に、この100年史を振り返ってもらえれば幸いです。

最後になりましたが、社史の編纂にあたって御指導頂いた大日本印刷様をはじめ、取引先各位、インタビューでお世話になったOB･OG の皆様に心よりお礼を申し上げます。

平成 30 年 12 月　100 周年プロジェクト委員会



東京本社
〒103-8313
東京都中央区日本橋富沢町11-7
KCIビルディング
TEL.03-3662-4701



大阪営業所
〒550-0011
大阪府大阪市西区
阿波座1-13-13
西本町中央ビル9階
TEL.06-6543-4701



静岡営業所
〒422-8066
静岡県静岡市駿河区
泉町2-3
アズマビル6階
TEL.054-686-4701

創業百年史日本橋とともに
2018年12月発行

発行　小堺化学工業株式会社
　　東京都中央区日本橋富沢町11-7 KCIビルディング
制作協力　大日本印刷株式会社
印刷･製本　東京都新宿区市谷加賀町1-1-1

kosakai CHEMICAL INDUSTRY

社員一覧
（2018年6月現在）

代表取締役社長
小　堺　裕一郎

常務取締役
中　村　正　俊

取締役
小　堺　ひとみ

取締役
青　木　知　廣

監査役
氏　家　和　夫

執行役員
高　橋　昭　人
小　堺　裕　仁

畔　上　尚　宏
新　井　廣　一
飯　島　隆　志
飯　田　一　典
池　田　貴　一
石　川　恭　平
糸　賀　麻友子
岩　城　道　子
浦　野　幸　一
岡　村　拓　哉
小　川　隆　夫
川　又　寛　三
國　忠　匠　子
小　池　一　弘
榊　原　稜　朔
佐久間　華　子
澤　木　俊　樹
島　田　知代子
清　水　友　幸
下田中　直　生
関　　恵美子
高　山　浩　則
長　島　京　子
中　村　幸　介
野　村　定　徳
野　村　智　之
初　川　宅　朗
福　山　直　貴
藤　田　佳志子
藤　本　英　治
松　田　眞　実
三　上　貴　博
水　田　真紀子
森　　陽一郎
八木原　巧　介
矢　口　堅　一
山　崎　由香里
米　持　広　一
渡　辺　　渓

（役員他50音順）